

上地の風（第二号）

ふるさと上地

岡崎市立上地小学校

上地の風 (第二号)

ふるさと上地

岡崎市立上地小学校

はじめに

「上地学区は、自然に恵まれて環境がいい」「太陽も緑もいっぱいだ。交通の便もよく、住みよい所だ」などという声をよく聞きます。

たしかにその通りですが、私はこれだけでは物足りないと思います。何がどういいのか、何にぬうちがあるのかはつきりさせ、それを次代を担う子供たちや、学区の方々にもっと知ってもらいたいと思います。

ところが「灯台下暗し」といわれるように、自分たちの足元のことには、案外知らないものです。また、日本全国から上地へやって来られた方にとっては学区が新しいので、資料も少なく、知りたくても、知りようがなかったことでしょう。

こんなわけで、本校では今年度初めから、上地学区の自然や歴史や文化などを掘り起し「ふるさとシリーズ」として刊行を続けてきました。この度、年度の終わりを迎え、これらを改めて整理し直し「ふるさと上地」発行の運びとなりました。拙い記録ではありますが、いわば足で書いたものです。本校の教務主任、松原暁三教諭が中心となって、全職員で調査、整理、記録にあたりました。何分、校務のかたわら手がけたことですので、不十分なところや誤りもあろうかと思えます。ご指摘くだされば幸いです。

もとより、この記録は、市議会議員渡辺五郎氏、学区総代会長成瀬司氏、学区社教委員長柴田勝氏はじめ学区の学識経験者、古老の方々、区画整理組合の加藤・畔柳両理事長、上地町総代会長佐藤益荒氏等学区外の皆様のご協力によってできたもので、ここに厚くお礼申し上げる次第です。

昭和六十三年三月

目次

はじめに	1
一、上地の山が動いた	5
二、上地学区周辺の歴史	18
三、上地の山が呼んでいる	21
四、上地に集まる野鳥	31
五、創作童話「松風のうた」	43
六、大谷公園整備に夢広がる	61
七、創作童話「りゅうとてんぐの力くらべ」	75
八、樹齢三百年の「一本杉」を訪ねて	87
九、百年前の「上地学校」	99
十、ふるさとの「方言」を訪ねて	118
付録 昭和六十二年度上地小学校の歩み	127
「学校だより 上地」	
おわりに	151

上地の山が動いた

1、上地の山が動いた

八月一日（土）の午前、猛暑の中を両理事長さんが来校されました。一面、山や田畑だったこの上地地区を二四八号線が南北に走る新興住宅地に大転換させる事業を成功に導いたお二人です。

「上地は、むかし、やせた山だった。」

「二四八号線を開通させるのがきっかけで区画整理が進んだ。」

「一時は反対の地主さんの方が多かった。」

開発前夜の上地地区の地図を指さして、その苦しかった歩みを淡々と語られるのでした。

「この事業の記録をこれから、この地区を第二のふるさとにして暮らしていくことになる子どもたちや若い人たちに残さなければと計画しています。」

こんなふうにも話されました。お年を感じさせない若さは、上地地区開拓にかけてきたロマンあふれる半生によるものでしょう。

嶋田校長、社会科主任青木先生と一緒に、時間を忘れてお聞きしました。以下、お話の要点を紹介し、「ふるさと」学習の参考になればと願っています。

次のお二人をご紹介します、本文に入らせて頂きます。

岡崎上地第二特定土地区画整理組合	理事長	加藤 利吉
岡崎上地第一特定土地区画整理組合	理事長	畔柳八百吉

一、二四八号線がきつかけ

私たちの組合は、昭和四八年に愛知県議の認可を受けて設立しました。当初は、今のように第一と第二に別れておらず、一本化していました。設立の動機は、地主からの盛り上がりではなく、県が二四八号線の交通量緩和を目的としての熱心な働きかけでした。そのための用地を区画整理組合事業で確保してもらえないかということが岡崎市区画整理指導課と県の岡崎土木事務所の強い意向でした。交通難解消には、新しい二四八号線を作るしかないという考えです。

しかし、地主さんの賛成がまだ十分に得られない段階でしたので、組合の設立総会后二か年間も着工できない状態でした。年配の反対者は「農地を死守する」と言われるし、順調に進みませんでした。

一、正副理事長交代で事態を打開

発足当初は、小林吾一さんが理事長だったんです。私は（加藤）工事担当の理事でした。県は早く早くというし、反対の地主さんもあるし、私たちもずい分困りました。しまいには、感情的な問題にまで発展してしまい市の大郷助役さんとも相談し、組合の人事を一新するという方策を取るに至りました。

臨時の理事会を開き、理事の互選で新しい人事を決めて工事開始にそなえていくことになりました。十五人の理事と三人の幹事で協議して決めました。それが昭和五十年十一月の起工式前で、正副理事長交代で事態の打開を図ったというわけです。

私が理事長、副が今第一区画整理組合の理事長の畔柳さんです。こうして、起工式の後、手のつけられる所から工事を進めていきました。

二、二二つの組合に分かれ再山山発

昭和五十一年に「大都市周辺宅地供給等に関する特別措置法」が国会を通過して、国県両方の厚意もあり、上地地区の区画整理事業がうまく進められるようにという配慮を受けることとなりました。そこで、建設省事業の第一号にのせよう、その代わりに国庫補助でできる限り組合を助けようということになった訳です。百四十八ヘクタールもの広範囲な事業では、二十年もかかってしまうから、二組合に分けてスタートしたらとの国県両方からのご指導を得ました。この年の十二月十五日に県知事からの認可を受けて正式に二組合での発足となりました。第一の方は今までの組合を存続、第二組合は新しく設立するという事で新役員も選出して再出発をしたというのが経過です。

四、新体制で順調な船山

二つの組合の境は、衣浦岡崎線も二四八号線も道路センターにしようということと線引きをしました。（地図参照）地域の特徴は、第一が住宅地と農地、そして、一部山林があり、第二はほとんどが山林、中でも二十一ヘクタールもの保安林、ほんの一部の農地があっただけという状態でした。こういう地勢的面積的な面の考慮をしていきました。従って、第一は再スタート、第二は事業計画と役員を新たにもって設立ということでした。発足当初の経験を生かして、反対をしていた若い方にも理事に就任していただいて、地域上げての区画整理事業の推進を図るようになりました。これが、事業の順調な再出発の大きな布石になったとも思われます。また、米の余剰ということもあり農地の休耕・転作という国の農業政策転換時期にあったことも大きく影響したのでしょう。そして、第一回の保留地処分が思わぬ高価格で大成功したことが、賛成していた人は勿論、反対していた人た

ちにも事業の意義を改めて認識させる契機になりました。こうして、事業への反対・疑問ということが、ほぼ一掃されることになりました。

五、保留地の半分以上は公共施設に

「県のためにえらい目にあつた。」
「バカなことをしたもんだ。」

発足当初こんなことを言っていた人も、やがて、「やってよかったなあ。」というように変わってきました。先日、第一の地区で十三筆の保留地処分をしましたが、好成績で一回の公開抽選で全部売却されてしまいました。入札参加者は百十五名もあり、一筆平均九人に近い高競争率でした。評価委員さんと協議し、予め時価より低く押えて適正価格を設定し、不法価格にならないよう配慮して公開抽選をしています。

第二の方も昨年、同じように実施しましたが、やっぱり一回で完売という成績でした。この上地小学校も市民センターも区画整理組合の保留地でした。勤労福祉会館も私共の保留地でした。こうして、保留地の半分以上は公共施設になっています。

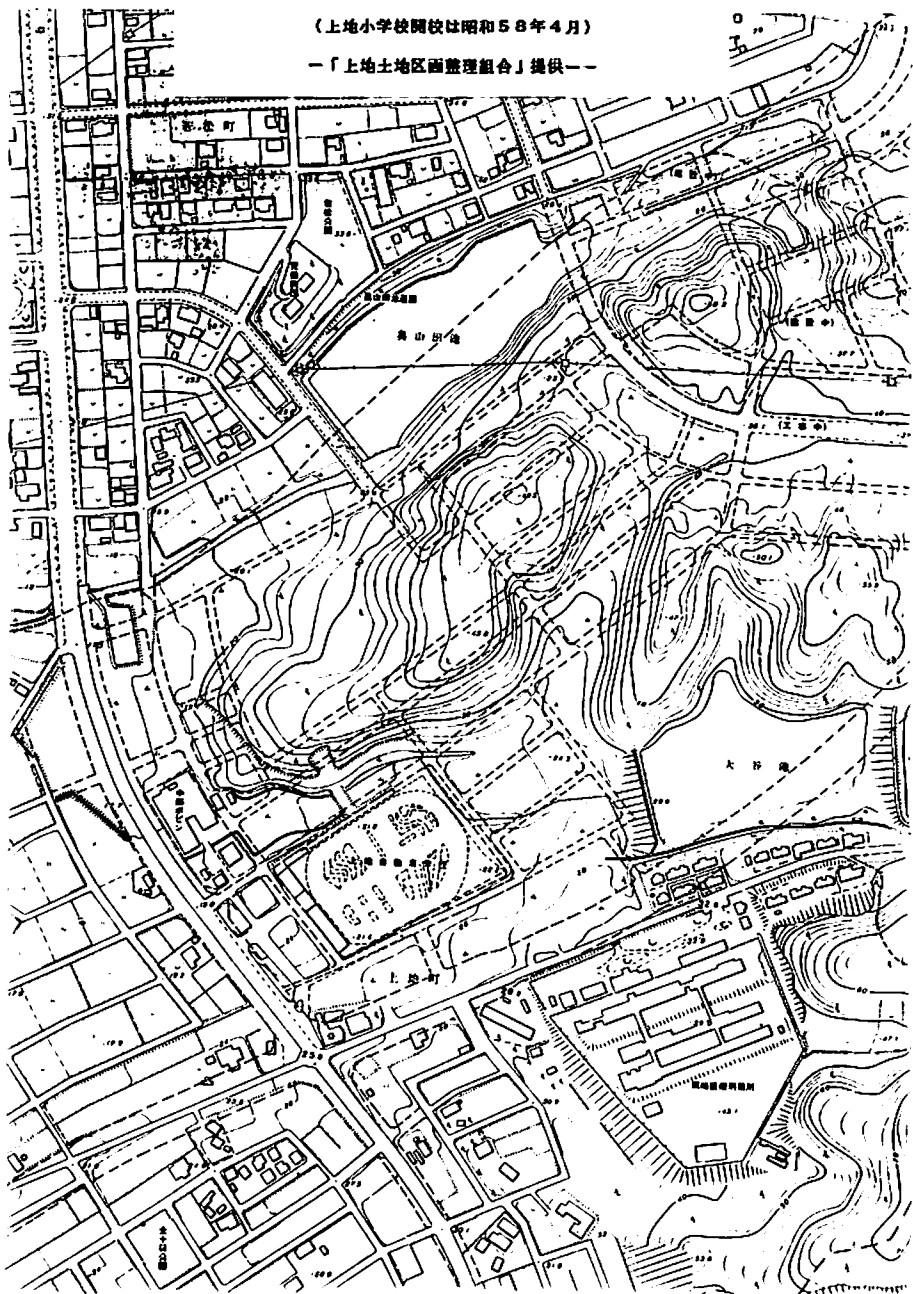
六、上地の山を動かす工事

開発作業の中では、矢崎の標高五十七メートル地点が一番高かったと思います。第二地域の山のほとんどは国の保安林でした。逆に、第一地域では、五メートル以下の湿地が多く含まれていました。そこで、高地を削った

昭和54年7月空中撮影・11月現地調査による上地地区地図

(上地小学校開校は昭和58年4月)

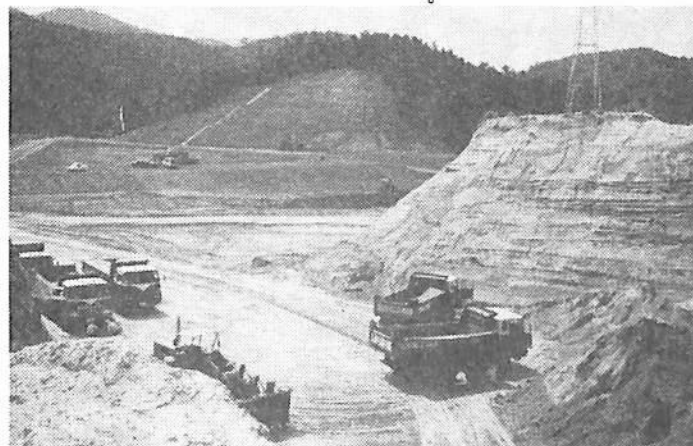
—「上地地区画整理組合」提供—



土砂を一日にダンプ数百台分、運搬しました。約六十万リューベを第二地区から第一地区に運んでいます。それでも土砂は余ったほどですから、すごい量です。今の衣浦線をダンプが走ったわけですから、その砂ほこりは大変なものでした。医療刑務所の官舎の人や道路近くの人から、洗濯物がほこりで汚れてしまっただろうがないと言われて困りました。だから、散水車で水をまいたりして対策を講じはしましたが、迷惑もおかけしたことでしよう。

七、事業費の大半は組入口負担

これら開発の費用は、二四八号線用地買収を除いて、全部、組合の負担で進めました。この用地買収と言っても、不動産鑑定士の鑑定した価格で組合の方へ「公共施設管理者負担金」という形で収入になりました。しかも、それは現金ではなく工事で使いなさいというのですから、その工事については、県が検査をすることになります。設計書そのものに誤りがないか、工事は設計通りにできているか等厳格な検査が行われました。国庫補助でも、岡崎衣浦線の用地費・築造費・移転補償費等を積算して工事費として年度ごとに配分するというやり方でした。だから、事業費は金融機関からの借り入れです。連帯保証人は、組合の理事でしたが、事業の見通しが明るいので借り入れそのものは、割合簡単な手続で行えました。組合の資金計画は安全を期していますので、事業費は実際より一割ぐらいは高く、保留地処分は時価よりも低めに押えてあります。



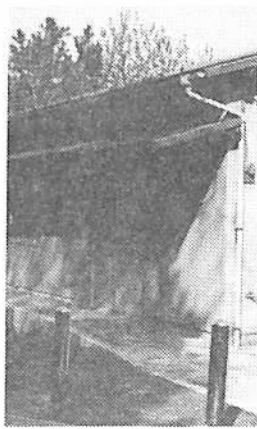
区画整理工事現場

た。あとは、理事が腹をくくって、最高時、八億円の借り入れ金をかかえて取り組んできました。事業計画終了の昭和六十三年度を間近にしてやっと一息というところです。

八、昭和六十四年に完工式を予定

年度末が三月いっぱいですから、私たちの計画では、昭和六十四年の二月に完工式を行おうと思っています。当初いくつかの問題もあり、夜も眠れない時が何度もありました。八億もの借金に年七パーセントを越す利息がかかってくるわけですから、毎日一宅ずつ保留地がなくなっていくという状態でした。正直言って、心配もありました。今でこそ、事業が黒字になっていますが、自分から言うのもおかしいですが、人に言えない苦労がありました。今、思い返すと、県が早く早くと言って指導を下さったおかげだと感謝しています。また、岡崎市議会議員の渡辺五郎さんが組合の幹事として、常に適切な助言をして下さったことも忘れられません。そして地域の方から「昔、あんなに反対して悪かった。」という声も聞かせて頂いたりで大変うれしく思っています。

私たちの進めてきた事業が、これから、この上地で「第二のふるさと」を築こうとされている人や子どもたちに正しく伝えられていくことを願ってやみません。今日の私たちの話が、その一助になれば、そんな幸せなことはありません。



第2区画整理事務所

上地学区周辺の歴史

2、上地学区周辺の歴史

↑岡崎市史編さん事務局長 岩月栄治先生の講話記録↓

「上地は山ばかりだった」

「そんなことはない。何かあるはずだ」

「奥山田池のほとりに登り窯の跡があったと聞いている」

開校五年目を迎え、徐々に学校の足元である地域に目が向き始めた六月、職員の間でこんな事が話題に登ってくるようになりました。嶋田校長が「足元からの教育」を提唱していることもあって、視聴覚主任青山先生や社会科主任青木先生と学区を歩いたり、岡崎市郷土館を訪ねたりし始めました。

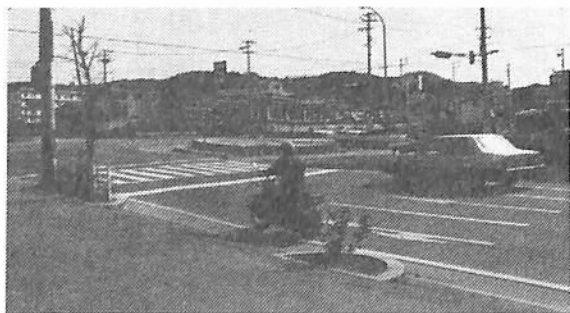
そうしている間に、上地にも、貴重な歴史があることに気づきました。「上地には、何もないだろう」との先入観が、大きな間違いであったのです。岡崎市史編さん事務局長岩月栄治先生をお訪ねして、ますます、その感を強くしました。

「新興の地域で、まだ、誰も系統立って調査はしてない分野ですが、分かる範囲でお話しましょう」との快諾を得て、八月六日（木）校内現職教育にお招きすることができました。

「上地の歴史が、こんなに古いとは知らなかった。」

「ぜひ、これを契機に地域を勉強し直さなければ……」

こんな声が、職員の間から起き始めています。以下、岩月先生の講話の要旨を紹介し、今後の研究の土台にしていきたいと思えます。



248号線と交差する岡崎・衣浦・線（吉良道）

一、「第二のふるさと」づくり

校長先生を初め先生方の上地学区への熱い思いにどこまでお応えできるか、大変不安であります。先日、松原先生が市史編さん室にお見えになって、保護者の皆さんの出身県調べの結果を見せて頂きました。びっくりしました。保護者の半分近くが他府県の方で占められていたからです。従って、今後、ここ上地が「第二のふるさと」になるわけですが、新しい開発地域で史料なども少ないため、上地の歴史解明は、これからの課題です。

それだけに、学校が率先して果たすべき役割が大きいと思います。そういう上地小学校の先生方の気迫とでもいうものが伝わって来ます。「第二のふるさと」づくりのセンターとして、又、中核としての学校でなければという先生たちの熱意に何とでもお応えしなければと思うのであります。

こんな気持から、お話を引き受けをしたわけです。とは申しても上地を取り立てて研究した書物も実績もまだありません。

こんな制約の中での話であることを前もってご了解願いたいと存じます。先生方と一緒に、上地の歴史を考えていくという気持で「ふるさと」づくりに貢献できたらと思います。



学区内を南北に走る248号線

一、上地の古代から平安末

(一) 参河国と額田郡

上地は、参河の国に属しています。この参河に支配者らしい者が初めて登場したのは、小月之山君（オツキノヤマギミ）と許呂母之別君（コロモノワケギミ）といわれます。小月之山君は、矢作川上流の旭村月原付近に居住したといわれます。許呂母之別君は豊田の上學母にみえたといわれます。大和王朝の初めの時代で、縄文より弥生期ですから、約二千年も前です。

弥生時代になりました。矢作川は乱流していましたが、今のような流域で米を作るなど、とても無理なことだと思われま。ほんの川のがけつぶちに沿って作るとか山間に作るとかの程度であったでしょう。この矢作川上流の西加茂郡で、まず国づくりを始めた小月之山君と許呂母之別君の御前を流れる川であったので、これを御川（ミカワ）といい、これがなまって、参河となったといわれています。矢作川こそ西三河の歴史と文化を生んだ母なる川と言えましょう。弥生時代になって、村の統率者が亡くなると、古墳として祭られています。岡崎市には、何と、確認されているだけで、二百七十あります。このうちの三分の一が青木川以北の岩津地区、矢作川右岸が三分の一、乙川付近から当地にかけてが三分の一というようになっています。やや、南の方が少ないと言えます。

大和政権の支配が進み、各地の小さなクニがだんだんと統合されていきます。その過程で、いくつかの国づくりにまつわる伝説が生れていったわけですが、額田郡一帯で、いわゆる部民が登場するのは、「額田部」（ヌカタベ）です。夏山の八幡宮に祭られている天津彦根命（アマツヒコネノミコト）は大和額田部といわれています。その後裔が、岡崎小学校学区の柱津神社に祭られている柱津連（ハシラツノムラジ）で、額田郡の郡造だったといわれています。

このように、矢作川流域に米づくりを主体とする小さなクニが、大和政権に支配されてきた七世紀の初めに参河（西三河）に登場します。それは、山城額田の臣（オミ）系の饒速日命六世孫伊香我色雄命（ニギハヤノミコトノロクセイノマゴノイカガシキオノミコト）の五世の孫知波夜命（阿知和町・謁播神社）という方であり、物部氏の祖先に当たる方です。こうして、参河一円が、この物部氏の支配下におかれ、その荘園が発展していくわけです。さらに大化の改新後（六四六年）に、新城、鴨田、位賀、額田、麻津、六石、大野、山綱、の額田八郷ができていきます。この地区の土呂は麻津の郷に入っていました。麻津の「津」という字からも明らかのように、矢作川乱流時代の港だったことが分かります。

やがて、大宝律令（七〇一年）により、西三河と東三河が一体となり、国司（豊川市八幡町）がおかれ、源頼朝まで九十五名の国司が支配しました。また、伊勢神領も多くあり、この付近の稲田も、その伊勢神宮領だったとも言われています。

（二一） 矢作川と荘園の開発

平安の末ごろ、矢作川一帯を広く開発して、初めて村づくりの開墾領主となったのが藤原季兼（フジワラノスエカネ）・季範（スエノリ）でした。前者を乙見冠者（オトミカンジャ）後者を額田冠者と言っています。藤原鎌足の子が不比等ですが、この不比等の子孫に当たるのが季兼で、その子が季範です。季範は、荘園領主であるとともに熱田神宮の大宮司になり、大きな力を発揮することになります。

こうして、矢作川左岸の開発が進んでいきました。そして、源頼朝が平氏追討のため、この一帯を通った時に在地の武士であった大見藤六の屋敷（今の福岡町藤六付近）に泊まりました。その折、庭内の八幡宮に戦勝を祈願しました。この頼朝が、後に九十五人目の最後の国司として就任し、建久元年（一一九〇年）に社殿を完成させました。それが、上地八幡宮です。

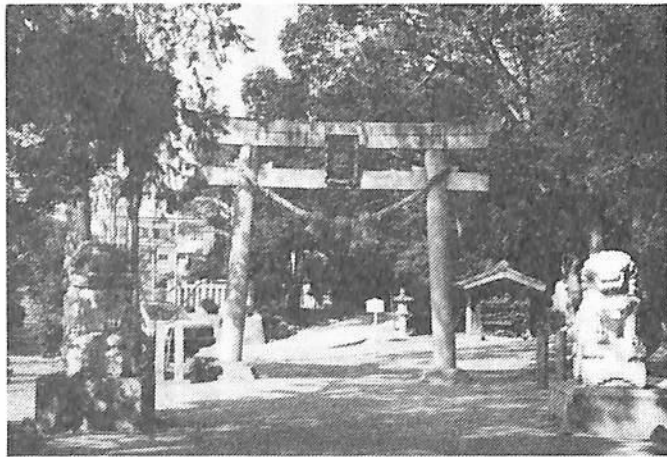
二、中世から近世までの上地周辺

（二一） 鎌倉街道と土呂良道沿いの土呂郷

岡崎の中世は足利義氏が三河の守護・地頭となり、明大寺に公文所・政所を設けて支配した歴史と松平八代史によって彩られるといつてよいでしょう。これは、六十二年度刊行予定の新編岡崎市史中世編（本文）によって詳しく語られます。

当時、この地の主要道路は、矢作の大和町から天白、下六名、今の東岡崎、そして、山綱・本宿に抜けていく鎌倉街道と、山中・竜泉寺から馬頭、土呂、西尾、吉良に通じる吉良道がありました。また、土呂から深溝へ別れていく深溝道もあります。上地は額田郡深溝の庄、土呂郷の中ということだったのでしよう。この中世を飾るものとして、土呂の本宗寺があります。

「三河真宗教団の法系」によると、親鸞が真仏、顕智、専海・円善等四人の高僧を肥沃な矢作川流域のデルタ地域に布教のため派遣しました。こうした流れの中で蓮如上人が自分の孫の実円上人に建立させたものです。当時、真宗で天皇の許可を得て堀に五本の線を書けるのは、本願寺の寺院で八つしかありませんから、如何に、本宗寺が本山直結の線が強かったかが分かります。この頃のことを記録したのが「土呂山畠今昔実録」です。この地方の歴史を知る上でとても貴重な記録です。



旧248号線沿いにある上地八幡宮

(一) 松平八代の頃と土呂の周辺

この本宗寺の門前町としての土呂ですが、千戸といいますが大したものではないです。永禄六年(一五六三年)の三河一向一揆で焼失してしまったのであります。この復興に尽力したのが石川数正です。土呂の三八市も、その表れです。この一揆が終わって、家康によって三河が平定された後、上地から土呂にかけて家康の家臣、松平念誓(親宅チカイエ)が宇治茶を興した上林竹庵の指導で茶園を作りました。これは、この地の発展を願ったのでした。産業の振興を図ったのであります。上地八幡宮の辺りが、念誓(ねんせい)屋敷と呼ばれています。上地でできたお茶を「土呂の初花」として浜松にいた家康に献上したのであります。

四、江戸期以後

(一) 上地村の亦変遷

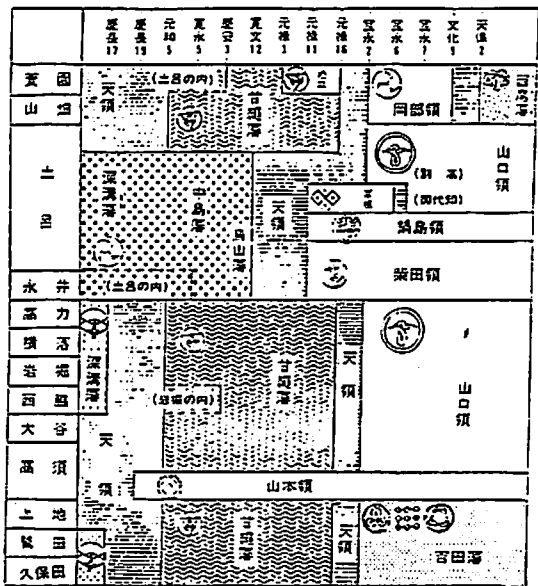
「土呂旧記」にも書かれています。当時この地の代官だった畔柳寿学の治水工事がありました。菱池の方に流れる上地川が、よく氾濫するので「寿学堤」と呼ばれる堤を作ったのです。それが、元和五年(一六一九年)です。これによって、この地方の米作りに大きな貢献をしました。この寿学は、のちに連尺の代官になりました。上地地区の資料が乏しいのは、領主が転々として変わってゐることにあります。

天正十八年(一五九〇年)では、岡崎領。元和五年(一六一九年)までは幕府領。以後、元禄十六年(一七〇三年)までは甘縄藩領、それからまた、幕府領になって、また宝永二年(一七〇五年)には、吉田藩領になります。天正の頃、五百八十七石だったのが宝永には九百八十八石まで大きくなっています。米作りが倍近くに、発展したことが分かります。古い農家等の明細帳が出てくれば、人口・産物もはっきりしてくるのですが、今のところ発見されていません。

(二) 大谷村の亦変遷

大谷の方は、天正十八年も、慶長・元禄も上地と同じですが、宝永二年からは、土呂と一緒の旗本山口氏の知行所であります。この絵地図が福岡町の伊奈正容家にあります。旗本山口氏は三河の七か村を知行して、土呂に陣屋を設けていました。甘縄藩は慶長十五年に松平正綱が幡豆郡で知行。そして、元和六年額田郡に加わり、寛永二年(一六二五年)に四国八郡にまたがって設立した経過があります。その後、元禄十六年に千葉県の大多喜藩になりました。

図-1 慶安3年時の菱池周辺の支配図



「上地村」周辺の支配図

明治になると、七年に上地・大谷合わせて百五十三戸、六百六十九人に、十五年には百六十七戸、七百四十五人となりました。以上大まかに、上地周辺の歴史をたどってみましたが、詳細はまだ不明部分が多岐に及ぶと言えましょう。

また、近代につきましては、ぜひとも、明治・大正・昭和前期を知る古老からの聴取や資料調査などをしてまとめて下さるよう切望します。ともあれ、先生方を初め地域古老の皆さんの調査に期待をし、できる限りのお手伝いをさせて頂くこともお約束して話を終わります。

上地の山が呼んでいる

3、上地の山が呼んでいる

「上地にも、確か、登り窯があったと聞いています。」

こんなことを聞いたのは、昨年五月だったと記憶しています。岡崎市視聴覚ライブラリーの指導員をしている白井先生が来校され、校長室で雑談していた時です。

「この地域には、ふるさとも感じるような歴史が無いんですよ。」と、諦めにも似た気持だった私たちにとって大きな励ましとなりました。この地を「第二のふるさと」とやって来た保護者の方たちと一緒にあって、「ふるさとづくり」を進めていかなければと思いつつも、こんな先入観がこびりついていたのでした。

こうして、白井先生との会話が耳に残りました。それが、きっかけになって、市史編さん事務局長の岩月先生、岡崎高等学校の齊藤先生、社会教育課の荒井主事を初め、学区の成瀬総代会長・柴田社会教育委員長・初代の鈴木社会教育委員長各氏を何度も煩わすようになっていきました。

本校社会科主任の青木先生や視聴覚主任の青山先生と、二度三度、四度と堤ヶ入の山中、上矢崎の宅造地、奥山田池の林中を歩き始めました。そして、だんだんと学区内の古墳・登り窯跡の存在が見えてくるようになりました。

「千年もむかし、この上地に焼き物師の集落があったんだね。」

「平安の時代、すでに、この山の枝や土を使って窯を焚いた『上地焼き物師』がいたんだね。」

「何か、夢を感じさせるね。」

奥山田池北側の山頂から、二四八号線が南北に走る上地学区を眺めながら話し合いました。そして堤ヶ入の山中で身体中を蚊に刺されながら話しました。

以下、「上地登り窯跡」のロマンを追ってみました。

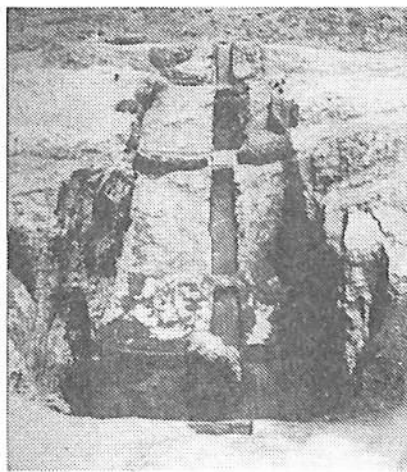
陶磁器を焼く窯の一つで、日本では最も広く使われてきました。山の斜面を利用して窯を築き、下方の一番手前が焚き口で、次の間は捨て間（すてま）とか胴木間（どうきま）といい、燃焼を最も効率的な状態に保つ役割を果たしています。

焼き物は第三室目に当たる所から並べていきます。窯は、上の方にいくに従って、だんだん狭くなり、最後に煙突がつけられています。こうした構造からも、分かるように下の室で使った火力の余熱が上の室まで及んでいくため、大量に効率よく焼き上がるという利点があります。

昭和三十六年十一月五日〜七日に、岡崎文化財研究会など七団体の行なった「堤ヶ入古窯」発掘調査記録によれば、

「岡崎市南端の標高五十メートルの丘陵南側斜面に構築されており、周辺には湿地帯の水田が入り込んでいます。この古窯は、額田郡幸田町の丘陵に分布するものと一つの郡を形成していると考えられる灰原を中心に調べた結果、焼成室と考えられる遺構を確認することができた。しかし、確認できたのは床面のみで側壁は認められなかった。焼成室は約三十度の傾斜角度で上昇し上部は水平となる。焼成室の上端は約五十度の急角度で再び上がり約四十センチメートルの壁状をなし、その上部は煙道部と考えられる床面となる。」

とされています。出土した遺物は碗・皿・壺・甕（かめ）・焼台でしたが、平安時代のものと思われま



上矢崎古窯発掘現場

一、上矢崎から灰釉陶器が出土

本校開校の昭和五十八年、勤労福祉会館周辺の区画整理が進行中のことでした。ブルドーザーによる宅地造成の作業の手を一時中断して、上矢崎古窯跡の発掘調査が行なわれました。下矢崎は奥山田池に、堤ヶ入は大谷公園北の山中にあるという事情から区画整理による造成から外れていたため、発掘調査は先に延ばされることになりました。上矢崎は、宅地区域の中心地ということで現状保存をすることは不可能だったようです。現在は整地され宅地になっています。以下、この発掘調査に当たられた齊藤先生・市社会教育課荒井主事のお話を紹介します。

(一) 灰釉陶器の窯

焼き物には上薬なしの素焼きが古くからありましたが、この上矢崎の窯跡から出土したのは、草木灰を水で溶かしたのを塗って焼いたものです。この焼き方は、尾張から三河地方を中心に発達していたものと思われま

奈良時代に近畿地方を中心に行なわれていた鉛釉陶器は素焼きをしてから上薬を塗り、八百度程度でもう一度焼くという手間のかかるものでした。草木灰の上薬を塗ってから焼くのですから、一回焼きです。薄い緑色を感じさせる陶器に焼き上がります。岡崎市郷土館に展示してありますので、ゆっくり、その淡い色合いをご覧ください。

この方法ですと、一度に大量に焼くことができ、多くの需要に応えることができます。九世紀頃、この灰釉陶器が一番盛んで、平城京跡からも多く出土していることから、全国各地に送られていたことが分かります。当時、灰釉陶器は、東海地方、なかでも尾張から三河の地方が独占していたと考えられます。上地の山の粘土と木を使って、焼き物師たちが窯を焚いていたのです。奥山田池ほとりの下矢崎の窯が一番古く九世紀の頃の物と思

われます。技法がていねいで、何枚かの重ね焼きをする場合は、三叉トチというものが使われていました。上矢崎・堤ヶ入の窯は十世紀頃のものでしょう。

(一) 窯跡は上地に三基

灰釉陶器は、九世紀の頃は中央や地方の役所・役人に使われていましたが、やがて、十世紀になると一般の庶民にも多く使われるようになりました。日宋貿易が始まり、中国の磁器が入ってくる十一世紀前半には、灰釉陶器の需要が減りだし、次第に終わりを告げていきました。

山中で陶器を焼くという仕事は、到底一人ではできないことではなく、「焼き物師」の集団で行なわれていたと思われる。窯跡からの出土品を見ると、主な製品は、碗・皿・甕等だったでしょう。

岡崎市内の窯跡は、古墳時代のもものが一つ、平安時代のももの(上地地区)が三つ、鎌倉時代のもものが三つと全部で七つあります。このうち三つが、上地の上矢崎・下矢崎・堤ヶ入にあるわけです。だから、上地は古代窯跡の宝庫と言ってもよいでしょう。貴重な歴史の宝庫です。

(二) 登り窯は別名「穴窯」

山の斜面に穴を掘って、天井の部分に後から土を被せて作るので「穴窯」とも言っています。窯の入口、つまり、焚き口には分煙柱があります。これは、千九百度の高温になる炎を窯全体にむらなくいきわたらせるという役目を果たしているものです。焚き口に続く焼成室に粘土を並べますが、そこに、炎が均一にいきわたるようにという訳です。何度も何度も失敗をしては、たどりついた尊い技法なのです。

二、上地の山が呼んでいる

夏休みの炎天下、嶋田校長、青木先生、青山先生と奥山田池のほとりを歩きました。水位が半分以下に減っていたので、かなり池の中央まで観察することができました。しかし、灰原らしいものは一か所からも発見することができませんでした。うっそうと茂った木々の中にも乗り込んでいきましたが、陶器の破片も見ることができません。蚊が、いやというほど体を刺します。互いの顔を見合って、その痛々しさに同情し合っただけでした。こりもせず、今度は堤ヶ入の山中に分け入りしました。斉藤先生や荒井主事から頂いた地図を片手にここではなにか、いや、もっとこっちははずと歩き回ること二時間。バットかと思うような大きなヘビがするつと追って行きます。大きなヤブ蚊が、滅多に現われることのない獲物に遠慮会釈なく吸いついてきます。ここでも、何一つ収穫は得られませんでした。

(一) 奥山田池南斜面の探検

文献の上には、はっきりと、その存在が記されているのに、その片鱗さえも見つけることができません。「上地の山が呼んでいる」

半ば諦めの気持が、私たちの心をかすめ始めた八月の末、校長先生が言われました。そうです。「上地の山が呼んでいる」のです。千年もむかしの「上地」の先人が私たちを呼んでいるのです。

これで終わったら、上地の山に、上地の先人に申し訳ない。こんな思いにかられて、決意も新たに二学期を迎えることになりました。早速、市の社会教育課荒井主事に現場への同行をお願いしました。大変多忙の中、九月四日(金)午後一時半、学校に来て下さいました。「上地の山に呼ばれてやって来ました。」校長室で、荒井主事がつこり笑って話されました。

勤労福祉会館西側から奥山田池南側の斜面に入りました。ここでも、あつという間に、ヤブ蚊の大群に襲われました。しかし、ひるむことなく荒井主事の先導で林の中をくまなく探索しました。直径一センチ五ミリ程の鉄棒を土中に打ち込んでいきますが、それらしい感触はありません。

「今まで、何度も池の底をさらえたりしているのです、陶器のかけらや灰原があるとは考えられません。」
この日、奥山田池に同行して下さった柴田社教委員長さん。

「でも、何となく何かありそうですね。」

取材のため、来校した毎日新聞社の亀山記者がカメラのシャッターを切りながら希望をつないでくれます。

「それは、上地の山が呼んでいますからね。」

蚊に刺されて膨れ上がった頬をなでながら、斜面を歩き続けました。そのうちに、季節はずれの夕立ちがザーッと叩きつけてきました。木の葉の間をぬって落ちてくる激しい晩夏の雨に全身ぬれ鼠になって、この日の探索を終わる羽目になってしまいました。

(二一) 堤ヶ入の山中に発見

ちょっとした行きづまりに直面して、落胆しかかっている時、初代社教委員長の鈴木勲さんが「堤ヶ入の窯跡なら以前、山を歩いた時に、それらしい物を見たような気がするのので一緒に出かけますか。」とのご好意です。願ってもないことと、五日(土)午前十時半から、嶋田校長・青木先生と四人で出かけました。

医療刑務所東にある「上地第二特定区画整理組合事務所」前に駐車し、大谷池の北側山中に入って行きました。

衣浦線から北の山中です。急斜面を下りてから再び山頂をめざして登ります。人が通った形跡はなく、蜘蛛の巣が張ったままになっていたり、落ち葉にも人の気配が残っていません。久しく上地の人から遠ざかっているのでしょう。焼き物の破片だけでも、木の枝をかき分け落ち葉を返しながら、細心の注意を払って頂上を目ざして登り続けました。しかし、ここでも、それらしきものが現われてきません。とうとう、勤労福祉会館を始め若松方面が一望できる頂上に立ってしまいました。

「確かにこの辺りだったと思うんですが……。」

鈴木さんが、やや困惑気味に探し回って下さいます。と、しばらくして、十一時三十分。

「あつた！これだ！先生！」

鈴木さんの叫びにも似た感嘆の声をたよりに頂上から南に下り始めました。落ち葉を五センチ程手で取り除いてみました。

辺り一面から出てきます。焼台、窯の壁と思われる焼けた土片、甕(かめ)の破片……。千年を越える過去の上地が顔を現わしました。感激の一瞬でした。やっぱり「上地の山が呼んでいる」のです。

(二二) 再び堤ヶ入の山中に

九日(水)午後二時から、荒井主事、青木・青山・嶋田校長の各先生と再び堤ヶ入山中に入りました。毎日新聞社の亀山記者も同行されました。すでに、五日(土)に発見しているので、



堤ヶ入の山中に古窯跡発見

専門家の荒井主事に確認をして頂くとともに、古墳遺跡についての調査も兼ねていました。

「これは、間違いなく窯の跡です。これだけ、焼台がごろごろ出てくるのを見れば、はっきりしています。」
窯跡に立った、荒井主事が確認しました。

「先生たちの執念の成果です。今後は、陶器の発見と窯の全容を浮彫りにしていくことですね。」
荒井主事の指摘のように、学区ぐるみの調査活動を地道に進めていきたいと思えます。

四、上地の山のロマンを追って

「上地の山が呼んでいる」

こう、固く信じて、私たちは、この夏休み中、上地の山を歩き続けてきました。蚊に襲われ、へびに驚きながら、長そでシャツに長グツ姿で、「上地の山のロマン」を追い続けました。そして、斉藤先生や荒井主事を初めとする専門家のご指導を得ながら貴重な一歩を進めることができました。

千年のむかし、すでに、この上地の山中に窯を築き、村をつくって生活した祖先のいたことをつきとめることができました。

奥山田池南斜面の窯跡（下矢崎）の探索、上矢崎古窯の発掘調査記録堤ヶ入の窯跡発見、上地町向山の古墳跡の確認などを通して胸のときめく思いの連続でした。

今後は、岡崎市教育委員会のご指導を得ながら、学区諸兄と力を合わせて、「ふるさと上地」づくりに役立つ調査や保存の運動を進めていかなければと思えます。

上地に集まる野鳥

4、上地に集まる野鳥

一、上地の野鳥ウオッチング

「区画整理事業以前の土地には、たくさん野鳥が集まっていたよ。都市開発で山を削り、人間が住み易くなった代わりに野鳥にとっては、その分だけ、生活の場が減ってしまったことになるでしょうね。」

開発による「新星」土地の誕生を喜びながらも、ずっとこれまで、この地を安住の場所に決めてきた山の生き物たちに心を寄せて語られたのは、「土地特定土地区画整理組合」理事長の加藤・畔柳両氏でした。

「先生、私は、あおい号の本をお借りしに学校に来る時よく見ますよ。奥山田池にたくさんマガモがやってきているのを」

昨年冬でした。「あおい号」の用事を済ませて借りたばかりの本を片手に、サンクガーデンで若松町の齊藤かおる先生が言われたのを思い出します。こんなことが重なりあって、私たちの関心も徐々にではありましたが上地の空を舞う野鳥の群に向いていきました。

担任でもあり、理科主任でもあった佐宗先生の影響を受け、野鳥好きな子どもたちが目立つようになってきました。「昨日は、奥山田池に二百四十羽もいたよ。マガモがAグループ八十羽とBグループが十六羽、それから、カルガモが百二十羽、カイツブリが十三羽、カワウが五羽……」と、三年生の男の子たちが、メモ用紙を見ながら「野鳥報告」に職員室を訪れるようになってきました。こうして、昨年の六月、四年生の子たちを中心に全く自主的な、いわば子ども自らの手作り「上地野鳥クラブ」が発足することになりました。以下、紹介するレポートは、今夏、子どもたちが上地にやって来る野鳥の群を観察したものです。私たちの学区が、心優しい子らに見守られ、再び、野鳥のオアシスになりつつあることを実感するこの頃です。

一、野鳥の群発見

——上地っ子の観察記録から——

ぼくたちは、昨年二月、学校の近くの奥山田池でとてもたくさん種類の野鳥を発見しました。それからは、日曜日ごとに、双眼鏡と野鳥図鑑を持って奥山田池に通い始めました。

カルガモ、カイツブリ、コサギ、カワウ、チュウサギと多い時には十種類ぐらい、合わせて二百五十羽も集っていました。

「ここには、マガモが十六羽だぞ。」

「カイツブリ発見！」

「カワセミが出たぞ。」

と言いながら、ノートに記録していきました。二月の雪の日も四月の桜満開の日も、ぼくたちは鳥を見に行きました。けれど春になると、池の鳥たちはめっきり減ってきました。渡り鳥が北の空に飛んで行ってしまったのです。折角、行っても十羽ぐらいしかいない時は、がっかりしてしまいました。しかし、ぼくたちには、別の楽しみが待っていました。それは、鳥たちの巣作りの季節がやってきたことです。家の軒下や庭の木、学校の木などあちこちで、ハト、ヒヨドリ、ツバメ、スズメの巣を見つけることができました。ぼくたちは心配しながら、巣の中からからのぞいている可愛いらしいヒナを見守りました。

二、夏休みにやって来た野鳥

待っていた夏休み。ぼくたちは、上地学区の野鳥を調べようと計画しました。先ずどこに多く集まるのか、その分布を調べることにしました。暑さを避けるために、午後三時頃から行動を開始しました。

成瀬は四区、白井は六区、天石は若松方面と、みんなで一つ一つ地図に書き込んでいきました。大谷池の橋の下には、イワツバメの巣があったり、ドバトがたくさんいてびっくりしました。池の周囲には、カワセミやセグロセキレイ、ハシブトガラス。そのほか、市の鳥のハクセキレイやハシボソガラスなど、とってもたくさん鳥たちがいました。今まで、知らずに通り過ぎていたのです。

南公園にも行ってみました。ちょっと見たところでは、飼鳥ばかりだと思っていましたが、実際はそうではありませんでした。結構、たくさん野鳥の姿をみました。近くの人から、アマサギも見たと聞いたので、朝四時前に見に出かけました。まだ、真っ暗な中を見に行きました。公園の近くの田んぼに、やっぱりいました。いつもは、二十羽ぐらいいるということでした。

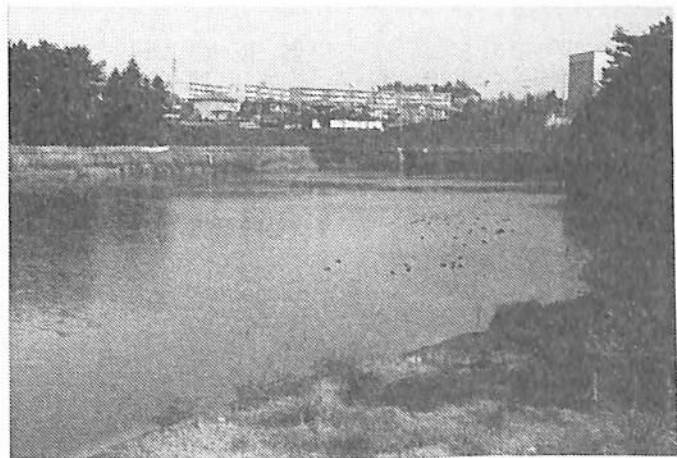
どうやら、この鳥たちは、上地小学校北方の山をねぐらにしているようです。日の出とともに、山から次々と池や田んぼに飛んで来るのです。次に、ぼくたちの観察記録を紹介します。

(一) 奥山田池

二月 八日(日)午後二時 カイツブリがリルルルルと鳴いていた。カルガモ百五十羽

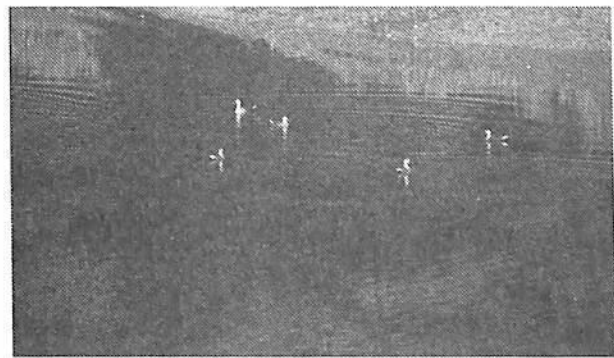
カイツブリ 五羽

コサギ 四羽



奥山田池に集まる野鳥

ヒヨドリ 一羽
 カワウ 二羽
 二月 十四日(土) 午後三時 マガモの数が十一日より八十二羽も減っていた。
 カルガモ 百羽
 コサギ 三羽
 マガモ 十四羽
 カイツブリ 十二羽
 コチドリ 一羽
 ハシブトガラス 二羽
 カワウ 三羽
 三月 一日(日) 午後四時三十分
 カルガモ 百二十羽
 カイツブリ 十二羽
 三月 八日(日) 午前十時 雪が降っていた。
 カルガモ 八十三羽
 カイツブリ 三十二羽
 セグロセキレイ 四羽
 カワセミ 二羽
 四月 十二日(日) 午後五時 さくらは満開だけど、すごく寒かった。
 カルガモ 二羽



奥山田池で遊ぶ野鳥

カイツブリ 十一羽
 四月二十五日(土) 午後三時 新しく夏鳥のコアシサシがきていた。頭が黒くて口ばしが黄色のきれいな鳥だった。
 カルガモ 二羽
 カイツブリ 二羽
 コアシサシ 六羽
 五月 一日(金) 午後五時
 カルガモ 二羽
 コアシサシ 二羽
 カワウ 二羽
 カイツブリ 三羽
 七月二十二日(水) 午前十時
 カルガモ 二羽
 コアシサシ 四羽
 コサギ 一羽
 カイツブリ 四羽
 八月 六日(木) 午前十時 カイツブリの親子を発見。とっても可愛い。
 カワウ 一羽
 サギ 三羽
 カイツブリ 七羽



カルガモ

八月 十二日(水) 午前十時 コアシサシも赤ちゃんがいるようだ。親が魚をとると、「ピーピー」わめいて近
 ドバト 二羽 寄って行く。

- カイツブリ 十五羽
- コアシサシ 六羽
- チュウサギ 一羽
- ヒヨドリ 一羽

(二一) 上地四区の田んぼ

七月二十七日(月) 午前四時三十分

- コアシサシ 二羽 休耕田で寝ていた。
- シラサギ 二十九羽 餌を取って食べていた。
- セグロセキレイ 二羽 近くの川で魚を取っていた。
- イワツバメ 十九羽 田んぼの上を飛んでいた。
- ハシボソガラス 二羽 木に止まってぼんやりしていた。



コサギ

七月二十九日(水) 午前四時三十分

- ダイサギ 三羽 学校の方の山から飛んで来て餌を取っていた。
- チュウサギ 五羽 餌を食べていた。
- カルガモ 四羽 よく見たら、親子で草むらの中に入って行った。

八月 一日(土) 午前四時三十分

- アマサギ 一羽 田んぼの中の近くで黒い物をつまんで食べていた。
- ダイサギ 三羽 田んぼに飛んで来た。
- チュウサギ 二羽 学校の方に飛んで行った。

(二二) ヒヨドリの巣

六月 一日(月) 家のどこかで「ピーピー」とひなの声がする。調べてみたが分からない。

六月 四日(木) 今日、あの「ピーピー」の正体が分かった。ヒヨドリの巣があった。巣はビニルと小枝でできていた。おわんより少し大きい。風呂場の裏で、しかも、ドアの近くなので、とてもうるさいだろうに。こんな所によく作ったなあ。

六月 五日(金) 赤ちゃんを観察した。口ばしは、オレンジ色みたいで赤っぽい。のどの中は赤い。体の毛は茶色と灰色がまじっていた。目の周りは黒いけれど、まだ閉じている。餌はいも虫のような物を食べさせてもらっている。

六月 七日(日) 二匹だとばかり思っていたのに、よく見たら、中に押しつぶされるようにして小さいひなが一匹入っていた。父親と母親が交代でやって来るので、餌をもらう間かくが短い。近寄って、のぞくと、親が「キーキー」と鳴いて怒る。

- 午前七時 十分 七回
- 八時 三分 五回
- 八時 五分 六回
- 八時 二十分 八回



ヒヨドリの巣

六月 九日(火)

いつもより、せつせと餌を運んでいる。ツバメと同じで雨が降るのが分かるのだろうか。それとも、天気予報でも見ているのだろうか。午後から、雨と風がものすごく強くなってきた。木がゆっさゆっさ揺れている。母親が、ひなを抱くようにして守っている。ひなは、お腹がすいたのか「ピーピー」鳴いている。父親がいないが、多分、全員入れないから、近くの木か何かには止まっているのだろうか。雨が小降りになって来ると、父親がさっそく餌をつかまえてもどって来た。

あんなにすごい風だったのに、巢のある所は家にさえぎられて風があまり吹いて来ない。もし南側だったら、つまり、風をさえぎる所がなかったら、巢は確実に落ちていただろう。あんな場所に巢を作ったわけが初めて分かった。

六月 十一日(木)

今日の朝、鳴声がないので変だと思ってみたら、一羽ひなが死んでいた。他のひなや親はどこへ行ってしまったのだろうか。一羽死んでしまったら「巢」の場所がえをしたのだろうか。無理な話だが、ぼくは思った。せめて、手紙ぐらい置いていってくればよかったのに……。」

(四) キジバトの巢

六月 十三日(土)

松原先生から教えられて、キジバトの巢を発見。場所は学校の夜間照明用のトイレの裏にある木だ。「巢」がどんな物で作られているか見たら、竹・草の根っこ・くさった葉っぱ・木の枝などだ。一つ一つ組み合わさっていて、とてもしっかりできている。こんなに工夫しているのでびっくりした。人間では、とてもできそうにない。

六月 十七日(水)

人が近寄ると、警戒する。「巢」の中をのぞくと、父バトはいない。母バトは卵を抱いてあたためている。ほとんど動かないし、全然鳴かない。どうしたんだろう。

六月 十八日(木)

あれ、母バトと卵がない。羽がそこらじゅうに散らばっている。へびにやられてしまったのか。「さし木園の所にへびがおった。」という松原先生の話思い出した。ひなが、かえるのを首を長くして待っていたのに、残念でたまらない。につっきへび。

(上地小学校野鳥クラブ 四年 成瀬 晋・天石 直・白井 康俊)

二、スズメの観察記録

冬のことだった。私の家で飼っている文鳥の餌の残りを庭のしばふの所にまいておいたら、スズメが食べに来るようになった。春になって、ちゃんと、餌ヅケを試みようかと家族で話し、お米屋さんから小米十キログラムを買って、毎朝しばふの同じ場所にまいておくことにした。しばらくすると、多い時には、二十羽も来て、みんなでチュンチュン大さわぎで餌を食べていた。

水飲み場も作ろうと思い、タイヤのホイールキャップに水を入れて、餌場の近くに置いた。初めはこわがって近寄らなかったスズメも、一週間もすると、勇気のある一羽が、まず水を飲み始めた。それからは、他のスズメも飲むようになり、水あびもするようになった。前の晩にエサをまいておくと私が起きた時には、もうなくなっている。いったい、何時頃から来るのだろうか、少し早起きしてもエサはなくなっていた。

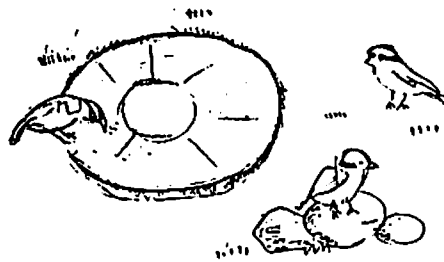
月 日	日の出	一番スズメ	日の入り	最後のスズメ	スズメの休養時間
六月二十五日	四時三十八分	四時三十分	七時十分	六時四十五分	九時間四十五分
七月二十二日	四時五十三分	四時五十分	七時四分	六時三十五分	十時間十五分
八月十三日	五時十分	五時五分	六時四十五分	六時二十五分	十時間四十分

この観察から、スズメは、ほぼ日の出の時刻にやってくるのが分かった。日の出がおそくなるにつれ、スズメのやって来る時刻もおそくなった。最後に帰るスズメも同じで日の入りよりは少し早く帰ることが分かった。夏と冬とでは、スズメの活動時間にすごい違いのあることが分かった。

スズメは、朝早くから来るが、朝が一番たくさん来るといわけではなかった。次のグラフは一時置きに何羽来たかを調べたものである。晴の日も雨の日も来るスズメの数にほとんど違いはなかった。雨でも、変わらず平気で食べに来た。

スズメが来るようになり、しばらくして、二羽のキジバトが来るようになった。とっても仲がよくいつも二羽一緒にいるから夫婦だと思ふ。キジバトの方が大きくて強いので、スズメはハトが食べている間待っていない。はならない。体が大きいだけスズメよりたくさん食べるし、一回に食べる時間も長かった。

七月二十七日のスズメ		スズメの数		食べた量	
食事時間(午前)					
六時四十五分～六時五十二分		三羽		合計	
七時 〇〇分～七時 〇二分		三羽			十グラム
七時 〇四分～七時 〇七分		五羽			
七月二十五日のキジバト					
食事時間(午後)					
二時 〇〇分～二時 十五分		二羽		合計	
三時 五十分～四時 〇五分		一羽			六十グラム
四時 二十分～四時三十五分		二羽			



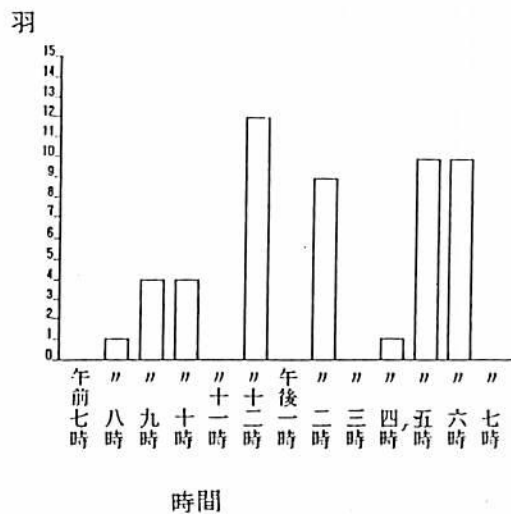
スズメの食事時間は一回当たり平均五分間、ハトは十五分間である。食事の量はスズメが一羽当たり0.8グラム、ハトは十二グラムである。ハトの食事時間はスズメの約三倍、食事の量は十五倍であった。

スズメを観察していて、一番うれしかったのは何と言っても、子スズメを連れて来た事だった。子スズメは、口ばしが黄色で自分では、まだ餌を食べられず、羽根をバタバタふるわせて餌を欲しがっていた。見ると、親は並んで待っている子スズメたちの口に順番に餌を入れてあげていた。その可愛い事と思ったら……

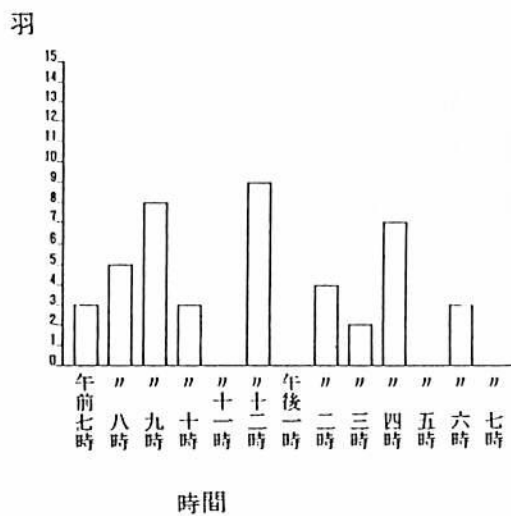
こうして、五月から七月まで子スズメを連れて来た親がたくさんやって来た。私たち家族は、毎日、「可愛いね。

創作童話 「松風のうた」

7月19日(雨)



7月22日(晴)



可愛いね。」と、言いながら、家の窓から見ていた。でも、八月になると、もうスズメは来なくなった。きっと自分で餌が食べられるようになったのだろう。

スズメは、思っていた通り、とても臆病で少しの物音でも飛び立ってしまうので観察するのが、なかなか大変だった。でも、とても楽しみだった。スズメの他にもヒヨドリ、ムクドリ、メジロもやって来る。この次は、こうした鳥たちの観察にも挑戦してみたいと思っている。

(六年 天石 佐保子)

5、創作童話「松風のうた」―上地のやきものものがたり―

「昨日の夕方、嶋田校長先生が大谷池にいたよ。作業服みたいなのを着とったよ。」

「ぼくたちはねえ、上地の畑の所で、校長先生が近くのおじいさんと話しているのを見たよ。」

子どもたちが、下校後や日曜日、地域で嶋田校長の姿を見かけたと言っては職員室にやって来て話して行きま

す。
嶋田校長は、この四月、本校に赴任されると間もなく、前任者の野田校長の敷かれた「地域に開かれた学校」づくりの道を自らの目と足で確かめながら実践を始められました。学区の有識者の皆さん、古老の方々を訪ね、今まで私たちが全く知らずにいた事が次々と明らかにされてきました。そのテンポの速さは、目を見張るばかりです。

ここに、嶋田校長自らの筆により完成をみた「松風のうた」は、昨年の夏、本校職員が堤ヶ入の山中に発見した平安時代の登り窯跡に取材した作品です。私たちは千年のむかしの上地に思いをさせ、焼台などの出土品を前にして、夢を語り合ってきました。

ロマンあふれる「松風のうた」は、すでに、秋の絵をかく会で、夏目・大沢・松野・田中の四人の担任が読み聞かせ、三年生の図画作品として生まれ出ています。豊かな夢を抱かせてくれる歴史にめぐり会うことができ、上地っ子と共に胸ふくらむ思いで童話の世界に浸うことができました。

ご家庭での憩いのひと時を「嶋田校長創作童話―松風のうた―」で楽しんで下されば、こんなうれしいことはありません。

松風のうた

—— 上地のやきものものがたり ——

むかしむかしのことです。

さくらの花の咲くころ、上地の里へ三人の旅人がやってきました。土呂を通って、お地藏さんのところまでくると、一休みしました。かしらの杉工門が、

「このへんは赤マツもたくさん生えているし、池があって水に不足はない。これでもいいねん土が出ると申し分ないのだが……。」

こんなことを言っていると、そこへ村の人が通りかかりました。

「もしもし、この辺にいいねん土は出ませんか。」

「えっ？ ねん土ですか。一体おまえさんたちはどなたですか？」

「はい、わたしたちはやきもの師です。いいやきものができる土地をさがして、旅をしているのです。」

「そうですか。それなら案内しましょう。実は大谷の池のそばに、むかしからねん土が出ております。」

「それはありがたい。ぜひ教えてください。」

村の人は、やきもの師たちを、大谷の里までつれていきました。

杉工門は、ねん土を手にとってぎゅっとにぎってみました。

「うん。この手ざわりならいいやきものができそうだ。さっそく、かまをほることにしよう。」



と、よろこんで言いました。

でしの矢助と太助も、ねん土をかわるがわるにぎってみました。

次の日、まず池のそばへ小屋を作りました。そして、山のしゃ面にそってかまをほりはじめました。

木を切りたおしてから、あなをほるのですが、木の根がじゃまになります。石や岩もごろごろ出てきます。三人で朝から晩までほっても、いくらもすすみません。

なにしろ、かまのあなは、はば約三メートル、長さ約十メートル、深さ約二メートルの大きさです。

今みたいがいい道具もありません。一月もかかってやっと半分ほどほれました。

野山のみどり、一だんと色こくなってきました。

矢助が

「ばかにむし暑いなあ。」

というと、

「黒い雲が出てきたぞ。」

と、太助が答えます。

ポツリポツリ、大つぶの雨が落ちて

きたかと思ったら、たちまちザーと

降ってきました。かしの杉工門が、

「こりゃかなわん。少し休むぞ。」

といって、三人は木の下へ入りました。

雨はますます強くなってきました。

どろ水がごうごう流れます。

ガラガラと石がころがっていきます。

やきもの師たちは、小屋へ入って、

ふるえながら夜明けを待ちました。

あくる日、雨が上がったので、出て見ると、せっかくほったあなはくずれて、どろと岩でうまっています。矢助は

「あああ、せっかくほったのに。これじゃあせっかくのくろうも水のあわだ。」

となさけない顔をしました。太助も、

「ほかの所へ行った方がいいなあ。」

といました。



「こんなことであきらめては、いいやきものはできんぞ。」

というのは、かしらの杉エ門です。ここで気をとりなおして、また、かまをほりはじめました。朝は日の出前から、夕方は星が光るころまでほりつづけました。

夏の終わりころ、やっと完成に近づきました。

「あと三日もほればでき上がりだ。」

「早くほり上げて、やいてみたいな。」

ところが、そのころ、ヒューヒューと強い台風がやってきました。

ゴゴッと雨風がおしよせてきます。

木が倒れます。石がころがります。

ドドーとだく流がおしよせ、やきもの師の小屋もかまも流されてしまいました。

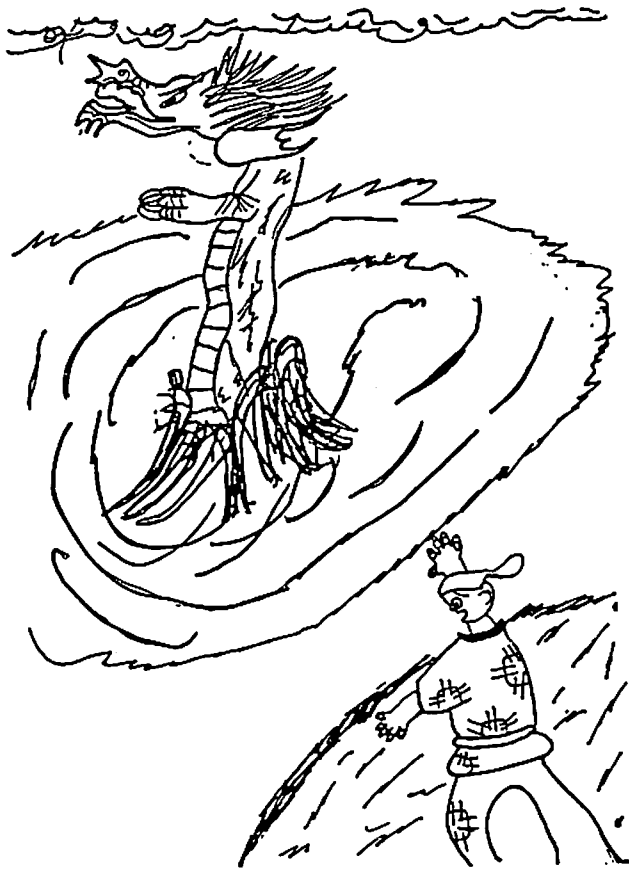
二度もさいなんにあつたので、杉エ門は、村一番の物知りのおじいさんに相談し

てみました。おじいさんは目をつぶってじっと聞いていましたがこう言いました。

「そりゃきのどくだ。ひょっとするとこれは大谷池のりゅうのたたりかもしれん。」

「ええっ？りゅうのたたりというの？」

「あの池にはのう、大むかしからりゅうがすんどるとい話だ。山や池をいじると、りゅうが怒ってあばれるという話がある、りゅうが出ると必ず大雨が降るのだ。」



「それじゃあ、どうしたらいいのですか。」

「りゅうをまつって、おいのりをするのがいい……。」

そこで、さっそく山のかげに小さなほころを作ったりゅうをまつりました。

「どうか山をけずるのを、おゆるしくください。」

「池がよくれますけどお願いします。」

と、しんけんにおまいりました。

こうして、赤トンボのとぶころになり、やっとかまができました。

こんどは、ねん土をこねます。やきものにするねん土は、水をまぜてまず足でふみます。そして手でこねます。かしらはいっしょうけんめい教えます。

「なんだ矢助、そのへっぴりごしは。もっと力を入れてふめ！」

「太助、かたに力を入れて、足をしっかり開いてこねておかんと、やく時にわれてしまっぞ。」

かおには汗がたらたらと流れます。

いきがハアハアはずみずみず。

「よく見ろよ、こんどは、ねん土をちぎって、こういふうじつた、ろくろの上におく

のだ。足でろくろをまわす。」

おやかたの手にかかると、ねん土はくるくる回りながら、まるで生き物のようにふくらんだりのびたりします。

「へーえ、さすががかしらだ。もうつばができちゃった。」

二人のてしは、目を丸くして見えています。

「さあ、でき上がったのは、表へ並べてかわかすのだ。五、六日もたつとやけるようになるはずだ。」

よくかわいたら、かまの中へ入れます。

「いいか、らんぼうにあつかうとふちがかけてしまう、やき台の上へいねいに並べるんだぞ。」

こうして並べ終わると、煙の出る穴だけ残して、天じょうを土で固めてしまいま

す。
「さあ、あしたの朝からいよいよかまたきだ。やきものではかまたきが一番むつかしい。」

「どんなふうにもつかしいの？」

「まず、二日間も火をもやしつづけんといかんのじゃ。」

「そうだ、途中で火が消えると、やけそくなってやきものがこわれやすくなる。」
「それから、……………」

「火のいきおいが強すぎて、弱すぎてもいかなのだ。形がゆがんだり、もろくなったりする。いいか。夜どうしまきをもやしつづけるでな、今夜はよおく寝ておけよ。」

霜がまっ白におりた日の朝早く、かまに火を入れました。まきは上地の山にたくさんはえている赤マツです。半年くらい前から切り倒して割って、よくかわかしておきました。

赤マツはよくもえるだけでなく、もえるときに出るススがやきものの色をよくします。

「しっかりもさんと、ねつが上がりません。」

下のたき口でたいた火は、まっすぐに上がって、けむ出し穴からぬけます。かまの中の温度は、千二百度にもなります。朝からたきはじめてあくる日の晩まで、たきつづけなくてはなりません。

夜になりました。夜は交代でまきをもやすことになりました。

「いいか太助、今からお前の番だ。いくら眠くても寝たらいかんぞ。」

「だいじょうぶです。矢助と交代する時までがんばります。」

しかし、そのうちに昼のつかれでたき口にどっこいしょと腰を下ろしてしまいました。と、ついウトウトしてしまいました。

どのくらいたったでしょう。

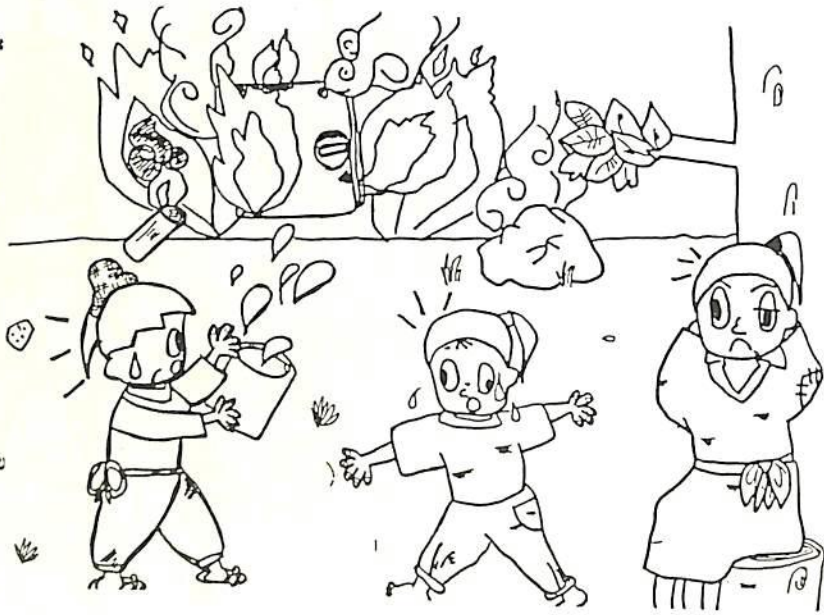
「火事だあ…山火事だあ。」と、さけび声。

とつぜん太助は夢を破られました。目の前はまっ赤な火の海。

「しまった！」

もうおそい。

かしらと矢助が木の葉で火をたたいて消しています。かまのまわりに火がまわっています。



「あれほど言っておいたのに、眠るとは何ごとだ！」

「すみません。つい、ウトウトと……。」

三人は池の水もはこんで、必死に火を消しました。

さいわい、発見が早かったので大火事にならずにすみしました。木はもえても、かまはぶじでした。

「やれやれ、大ごとにならんでよかった。もしかすると、りゅう神のお助けかも知れんなあ。」

杉工門はこんなことを言っておりました。

次の日も一日中たきつつけて、やっとたきおりました。

三人はもうヘトヘトです。小屋へもぐり込むと、床へ倒れこんで死んだようにぐっすりと深い眠りに落ちていきました。

五日ばかりほっておいて火が消え、かまが冷えてくると、中のやきものを取り出します。

「中のつぼを出す時が、いちばん楽しみだなあ。」

「わしは、どんなふうにやけているかと思うと、胸がドキドキするよ。」

「どうか、うまくできていますように。」

三人はこころの中で祈りながら、しんちょうにかまのふたを取りました。

「おお、できた。できた。」

灰の中でつぼが光っています。

「うん。形も色もいい。成功だ！」

「どうだ、この音のぐあいは、これなら固さもちょうどいい。」

と、つぼをかるくたたいて杉工門もいつになく上気げんです。

その晩は、久しぶりに酒をのんでお祝いをしました。こちそうは、山でとったうさぎや山どりの肉です。

酒がまわってくると、杉工門がいい声で歌い出しました。



花が咲いたよ 上地の里に

うめにさくらに すみれ草

こんどは、矢助と太助がつづけけます。

風がそよ吹く 吉良道ゆけば

今日もうたうよ ほととぎす

山のもみじが 夕日にはえて

大谷の池へ はらはらと

三人の歌声が高く低く夜の山へ消えていきました。

冬がすぎてももの花のつぼみがふくらむころです。

ある日、旅の坊さんが吉良道を通って大谷までやってきました。

杉エ門はお坊さんに、やきものを見せました。

「どうです。このつぼは、わたしらが苦心してやいたものです。」

「ほほう、なかなかrippなできばえじゃ。色といい。形といい。だが……。」

「だが？ どうしましたか。」

「たしかにいいできます。……しかし、都ではもっと、もっとrippはないつぼがある。」

「え、どんな？」

「つぼの表面が、つやつやと輝いておって、それはそれは美しいやきものじゃ。」

「どうして、そんないいつぼができるのでしょうか。」

「わたしでは、くわしいことはわからないが、聞くところによると、それは、瀬戸でできたもので、何でも、うわぐすりをかけてやくということだよ。」

三人は、ぜひそういうrippなやきものを作りたいと思いました。

相談した結果、瀬戸へ行ってそのやき方を教えてもらおうということになりました。

一番若い太助が、言いました。

「わたしが行って習ってきます。」

「おまえ、修行はつらいぞ、いいか。」

「はい、きつとやりとげて帰ってきます。」
旅のしたくをして、朝早く出発です。

二人は、山ざくらの咲いている小豆坂
まで見送っていきました。

「いいか、体（からだ）に気をつけてな。」

「わかりました。きつといい仕事をおぼ
えてきます。」

太助は瀬戸へついて、久五郎というや
きもの師の家をたずねました。

「わたしは、三河の土地からやってきま
した。うわぐすりをぬったやき方を教え
てもらえないでしょうか。」

「どこからきたって、そういうことはか
んたんに教えられるものではない。こと
わる。」



「お願いです。わたしはいいやきものを作って三河にひろめたいのです。」

「わたしの秘伝は、お前さんのような青二才に教えることはできん、帰った方がい
い。」

太助は、あくる日も出かけて、ことわられました。三日目も四日目も。でも、あ
きらめません。十日目からは、家の前へすわり込んで熱心にたのみました。

久五郎もこの熱心さに負けて、

「お前さんがそれほど頼むなら、でしにしてやろう。その代わり、どんな苦しい
仕事もやりとげるな。」

「はい、きつとやりとげてみせます。」

太助はきつぱりと答えました。

こうして、三年間、太助は血のにじむような苦勞をして、「うわぐすり」をつけ
たやきものの仕事をおぼえました。

太助は上地へ帰って、この仕事をみんなに伝えました。

今でも上地には、やきもののかまあとが残っています。

あとがき

ここに「ふるさと土地」の発行をみることができました。

直接あるいは間接にご指導を賜った方々や、快く資料の収集につとめてくださった各位、並びに古老の方々のご協力に対し厚くお礼申し上げます。

自分の住んでいる土地が、昔はどんな様子であったのか、どんなできごとがあったのか、大変興味があるものです。そして、それを知ることが大切なことです。これを読まれた方たちが、ふるさと土地のむかしに思いを寄せ、少しでも郷土に親しみをもってくださいるようになれば、これに勝る喜びはありません。

今後、古文書・文献などの資料が発見されました折には、上地小学校にご連絡いただきたくお願い申し上げます。

最後になりましたが、表紙の題字「ふるさと土地」は本校書写主任の高橋由美子先生によりますことをつけ加えさせていただきます。

昭和六十三年三月

上地小学校教頭 土岐 久夫

大谷公園整備に夢広がる

6、大谷公園整備に夢広がる

一、初冬の 大谷公園を訪ねて

十一月二十三日(月)、勤労感謝の日の午後、学区南東の大谷公園に出かけました。二つの池には、数人の釣りを楽しんでいる人がいます。しばらくの間、邪魔をしないようにじっと見ていました。

「何が目当てですか。」

「幸田から来ました。いい形のがつれます。」

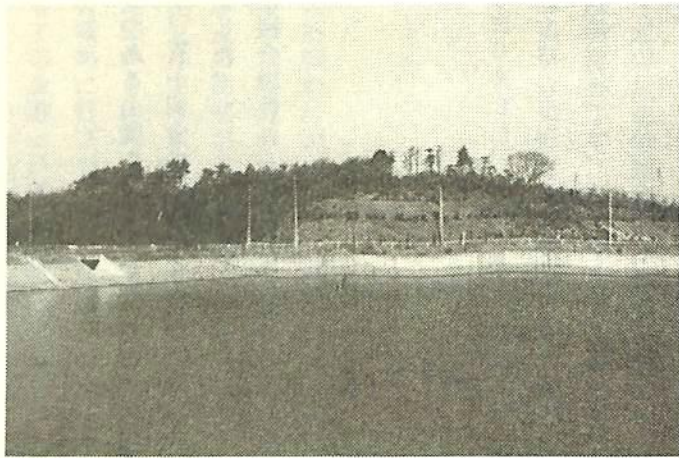
愚問でした。見れば、池べりにセットされた腰掛けが「へらぶな」釣り師が愛用するものです。マッシュを指先で、丁寧に丸めて針につけ、音もなくそっとポイントに落とししています。くじゃくの羽を思わせるような、浮きがかすかにゆれました。

その一瞬、さっと、竿が上がりまます。確かな手応えが、見ていた私にも伝わって来ました。

二十センチはあるでしょうか。平たい銀色の腹をくねらせて水面に姿を見せました。

「よし、行け。」

流石に、一流のへらぶな釣り師です。たもにも入れず、返し



初冬の 大谷池

のない針からはずして池に離してやっています。釣り師の仁義とでもいうものが感じられます。

「いつだったか、知り合いから、この池のことを聞いてから来るようになりました。向こうの端でやっているのが、知り合いです。今年の冬は、この池に決めました。」

こう話されると、もう次がかかっています。

「大谷池で会おう」こんな人たちがいることが分かり、「名所」化しつつある公園を感じました。「上の池」の東に目を移すと、カルガモが群れをなし、ゆったりと羽を休めています。五十羽までは、すぐに確かめることができました。犬を連れ午後の散歩を楽しむ若い女性が行き過ぎて行きました。

こんなことがあって以後、大谷公園整備に献身されて来た渡辺五郎市議会議員さんに数度にわたって話をお聞きし、まとめてみました。

一、区画整理事業と大谷の山

今から十年も前です。昭和五十一年から本格的な区画整理事業が始まりました。「第二特定土地区画整理組合」の区域内に大谷の山が入っていました。この地域は「上地区画整理事業の歩み」でも書かれています。標高六十メートルに近い山が連なっていました。しかも、そのほとんどが保安林です。（保安林―森林法により水源の滋養や砂防、風水害そして魚、風致保存などの目的のため伐採・放牧・土砂採掘の制限がされている山林のことを言います。）

こんな事情から、大谷の山を全部「開発」して平地にしようということではできないことでもありました。開発地域の最低三パーセントは保安林として残さなければいけない訳です。自然保護と法による規制という両者が重なり合って、山が残される事になったのです。

では、どこを残すかとなった時、池があり、自然の景観も素晴らしい場所と思われた大谷の山が決まったのです。開発地域に自分の山を所有していた地主さんは、その面積比率によって保安林を残していくことになりました。しかし、これだけで、公園になったというわけではありません。

都市計画法に基づく「都市計画審議会」にかけて、県・市の認可を受けた上で公園としての「指定」を頂いたという経過をたどることになります。自然の景観を重視するとは言っても、区画整理事業そのものの収支も考えなければならず、県や市の指導も受けながら、理事会では慎重な検討が続きました。人が入ったこともないような山の中に計画の目を向け、青写真をお互いに描き合ってきたのです。しかし、まだ、あの頃の時点では夢のような感じもあつたと思われまます。

二、大谷公園建設への歩み

さて、いよいよ、今の場所に公園を作ろうという直接のきっかけは大谷橋の計画でした。都市計画道路の「衣浦岡崎線」が池を横切って走る計画です。土盛りして道路を開通させるのが経費の上から考えれば、安易です。しかし、それでは、景観上、あまり感心できません。もう一つは、治水上の問題があります。大雨が降ったりした場合にも、その貯水能力が大幅に落ち込み、それが原因で大災害の発生という事態も予想されてきます。

当時はすでに、愛知県勤労福祉会館が完成していて、宿泊による他地域からの利用者もあり、その目と鼻の先のような場所に、大谷の山があるわけです。会館と大谷の山を何とか有機的に結びつけていったらというのも「公園」化への重要なきっかけになったと言えるでしょう。自然景観としての公園と研修・体育・文化などの場としての会館が相乗的な作用を果たしていけるだろうとも見ていました。

加えて、池の問題にふれると、池が二分されてしまい治水機能が激減してしまうということも予想されます。

土盛りした場合のマイナスファクターが多く上げられます。大雨の場合の貯水量が、土盛りによって大幅に減ってしまうことになります。こうした検討の結果、五十六年十一月から六十年二月までの三年余の年月をかけて橋梁工事が行なわれることになりました。総工事費は四億三千万円でした。全長百二十メートル、全幅二十三メートル「ポストテンション方式PC単純T桁橋」橋台二基、橋脚三基の「大谷橋」の完成をみることにしました。

こうした上地地区内での様々な建設事業が、錯綜して進行を続けていきます。上地小学校が昭和五十八年に創立されて、まだ間もない頃、PTAの会合で若松東の大川内さんが山の自然環境を生かしてキャンプだとか炊飯活動などができるようにならないものだろうかと提案されました。これは時機を得た素晴らしい発想として多くの人たちの共感を得ました。区画整理による新興地域だからこそ、そこに残された自然を利用していくことが必要なのです。

このような地域の現状を十分にふまえた上で、昭和五十九年度から市・県の行政側に申し入れて、大谷の「公園」化が本格化していくことになりました。

初年度の昭和六十年は山の北側整備に重点をおき、主として、今、広場がありアパートが建っている辺りを平坦にしていって造成工事が進められました。又、同時に池のふち周辺を安全に歩行できるような護岸施設の一部も行なわれていきました。

そして、昨年度は山の下に当たる場所の遊具や側溝、更にトイレの付設が進められました。この間の予算が約五千万円程投じられています。愛知県の補助金と市の予算を合わせた額です。今年は、今、急ピッチに進んでいる山の中の「遊歩道」計画など総計二千五百万円が充てられています。遊歩道というか「散策路」は、山中の急斜面ではコンクリート製の擬木が使われることになっています。危険箇所には柵や照明設備も行なわれます。今年度で、もうほとんどが終了ですが、東屋の建設が予定され、公園寄りの水飲み場や排水菅の設置が残っています。

ます。この費用が二千万円から三千万円は必要になりますので、大谷公園の総工費は一億円ということになります。

四、完成を前に今夏「炊飯活動」の煙上がる

いよいよ、昭和六十三年度には、大谷公園の全容が姿を現わし、その機能を存分に発揮することになります。今年の夏は、今までには見られなかった現象が起きました。それというのは、「水も出るようになったし、あの山を見ながら、子どもたちにキャンプでもやらせたい。」という声が、学区内の各子供会関係者から一気に上がり始めました。須淵にある岡崎市少年自然の家のような遠くまで行かなくても、上地には、立派な山がある。まだ、未完成とは言え、多少の不便さはあっても、地元で野外活動を体験させてやりたい。こういう声でした。

しかし、特別な「野外炊飯施設」がない現状では公園内で勝手に火を燃やすことは制限されているので消防署の許可を頂いた上で、尚、地元の婦人自主消防隊の皆さんの協力を得て「キャンプ」にこぎつけることができました。子供会の世話係りの方々も総出で大掛かりな炊飯活動ができました。五区の子供会などは、可愛い一年生まで歓声を上げて、はんごうを手にはしていました。炊飯活動は、こうして、何とか外でできましたが寝るといわけにはいきませんでしたので、四年生以上の子たちは市民ホームということになりました。それにしても、大谷の山を見上げて、キャンプなんて素晴らしい野



子供会のキャンプ

外体験です。

こんなこともあって、初代の野田校長先生とも相談して、子供会・PTA連名による岡崎市への陳情に発展していきました。「大谷公園内にキャンプ場」というわけです。これは、公園整備の当初計画にはなかったことでしたが、事態の進行とともに学区から湧き上った声でした。

子どもたちの夢がかかった陳情ですから、中根市長も大変傾聴して下さい「とても良いことだ。是非実現させよう。」という解答を頂くことになりました。それが、今年度中に完成することになっている「キャンプ場」として追加計画に入ったのです。今年度は、「思いきりテントを張って野外活動」という子どもたちの夢が実現することになります。それに向けての利用・管理の諸手続きなどの課題が残されていますが、できるだけ地元の皆さんによる「自主的な管理」という方向に持っていきたいと考えています。時間と費用をかけて遠くまでバスをチャーターして出かけなくても、上地という「ふるさと」で存分に子供会活動が可能になったのです。これは、大きな前進です。

五、大谷公園整備計画の全容

今年度の工事で一応の区切りとなる公園整備計画によってどのような公園が誕生するのか、岡崎市開発部公園緑地課の計画書から主な項目を記してみます。

水銀灯	六	遊園地	一
ベンチ	五	(バーゴラ)	
ハンドホール	七	(ブランコ)	

炊事場	二	(木製遊具)	
トイレ	一	遊歩道(園路)	一
テント場	七		

この他に来年度予算で、池のすぐ上に当たる場所に「東屋」風な休憩所が銅板葺きの屋根で設置されることになっています。そして、大谷の山を一周する形で進められている遊歩道(園路)は総階段数四百六十余段、総延長一キロメートルをはるかに越えると思われまます。標高六十メートルの山頂近くまで園路が続き、一箇所で六一階段の部分もあり、体力づくりコースとしても利用されることが予想されます。

「今年度三月末までには、工事が完了」(公園緑地課技術部野本係長)し、来年度は子どもたち待望の野外炊飯活動が展開されることになるでしょう。また、公園計画とは別に下の池の南東端には、嶋田校長の創作童話「りゅうとてんぐの力くらべ」に登場する「竜神さん」もあります。これは、今年の干支と関連し合って、新春早々話題を呼びました。

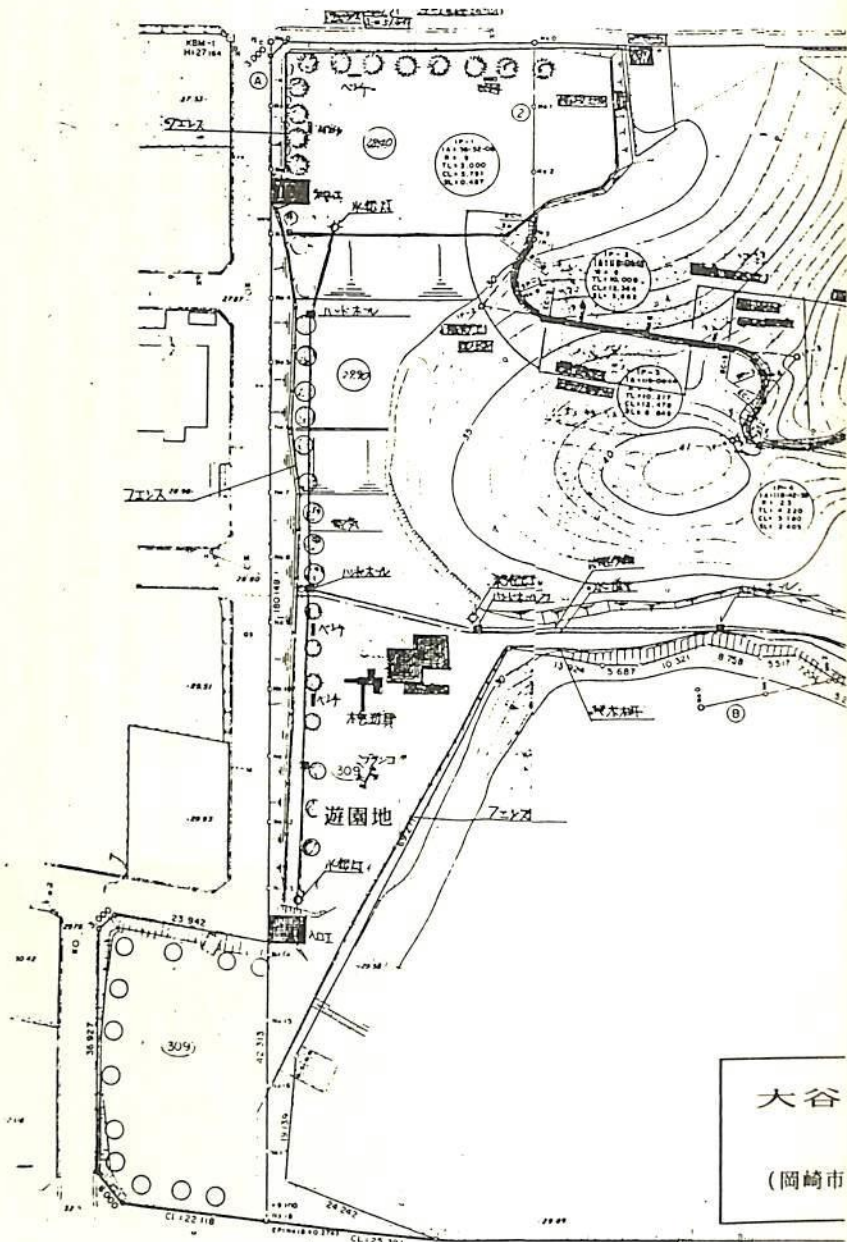
次に、「大谷公園整備計画」(岡崎市公園緑地課)図を紹介し、皆さんとともに大谷の夢を語り合う資料にしたいと思います。

七、大谷公園に学区ぐるみの夢広がる

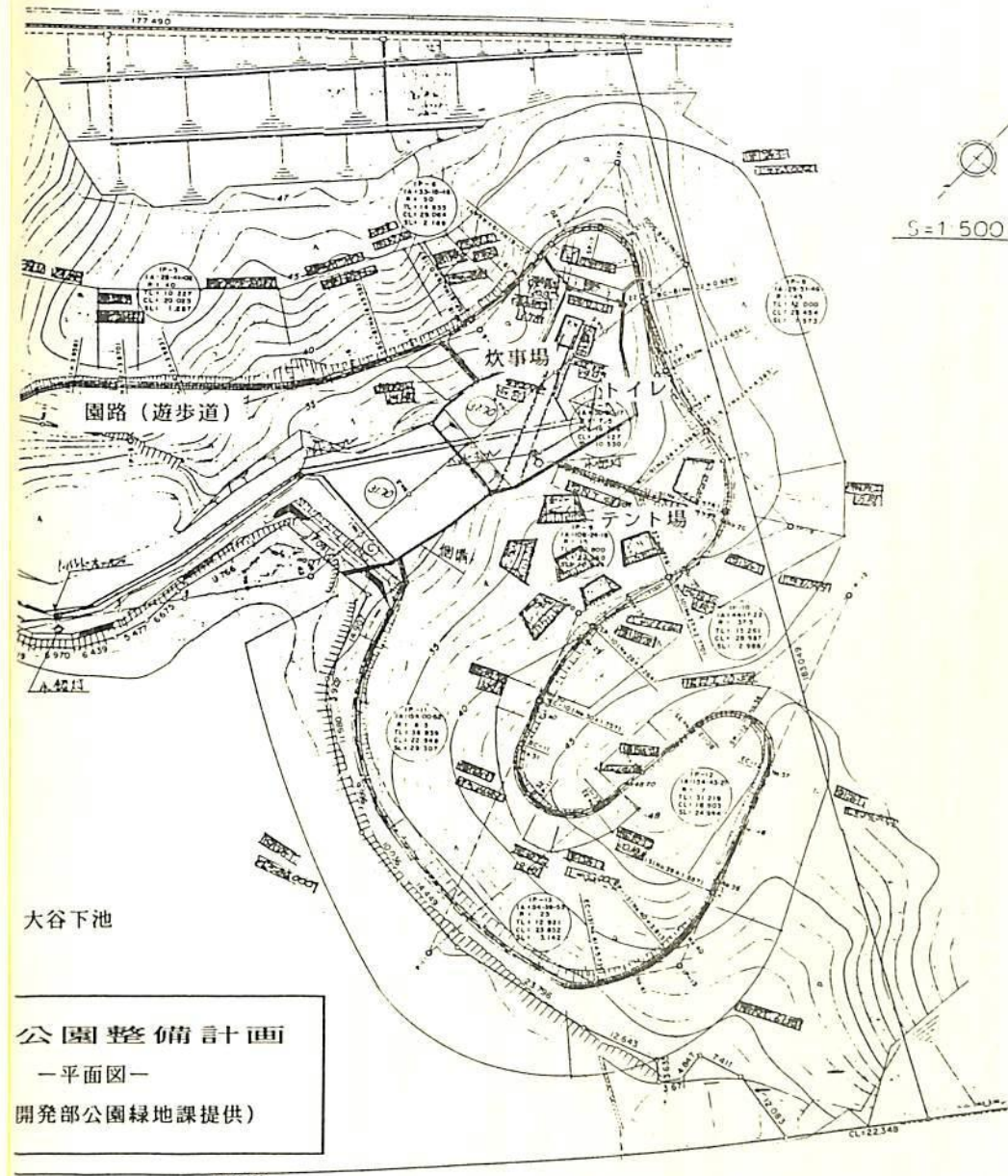
「先生、そんなら、大谷の山にはリスやウサギがおるじゃない？」

「おじいさんは、上地が山だった頃はタヌキもおったって話したよ。」

大谷公園整備にまつわる話を教室でしていた時、瞳を輝かせて、子どもたちが言いました。きっと、子どもた



大谷
(岡崎市)



S=1 500

公園整備計画
—平面図—
開発部公園緑地課提供

県道一衣浦・岡崎線一

ちが言った通りだろうと思います。一日に数百台のダンプカーが土砂を満載して、県道衣浦線や国道二四八号線をひた走る大工事で誕生した学区です。まさに、「上地の山が動いた」区画整理事業でした。

平安の時代、大谷の山や奥山田の池のほとりに住いを構えた「上地人」よりも、ずっと昔から生きてきた山の小動物に思いを寄せる上地っ子です。子どもたちの言うように、リスやキツネもいるのかも知れません。しかし、重機械による息をもつかせない激しい「開発」が、「先住民」の彼らを追い払うことになってしまったのでしょうか。

渡辺議員が指摘されるように「毎月、三十戸を越す個人住宅の建築確認申請が出され、市内屈指の人口社会増を続けています。」こうした傾向は、今後しばらくの間は急激な上昇カーブを描いて進むことでしょう。そして、もう一回り大きくなってきた上地学区から、完成間近い大谷公園に期待の声が上がっています。

「山の中でリスやウサギさんを見つきたい。」

「日曜日の健康ジョギングは、遊歩道を使ってやってみたい。」

「学区あげての歩け歩け大会でもやれそうだ。」

「学区つり大会もおもしろそうだ。」

テント生活が現実となった喜びに沸く子どもたちはばかりでなく、老若男女を問わず各層から、その夢が語り合われているこの頃です。

「今年こそ、公園内に見事な花しょうぶ園を実現させたい。」

こう語るのは雨が少なく、失敗に終わった昨年の移植を思い出しながら、今年を期す成瀬総代会長さんです。すべての学区の人たちの間に「大谷公園」への限らない夢が広がってきました。

八、カルガモが群れをなす大谷池

「先生、明日の朝七時に大谷池に集まります。」

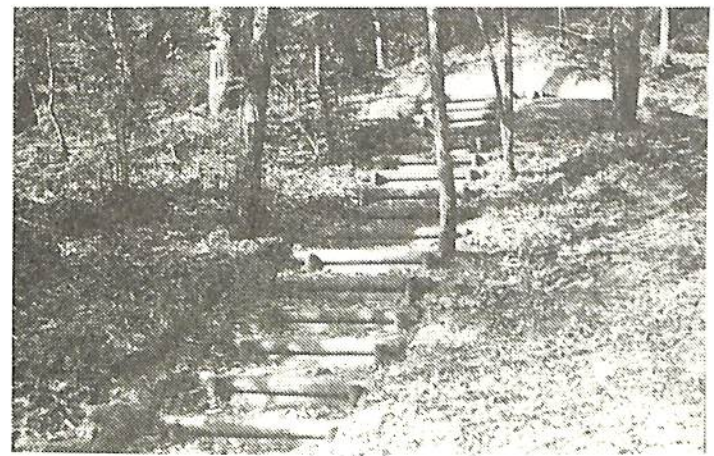
土曜日の下校前、野鳥クラブの子どもたちが「大谷池野鳥ウォッチング」行の計画をもって来ました。目的は最近、群れをつくって飛来して来るカルガモが「どっちの方角から来て、どちらに帰って行くか、昼間は何をしているのか」を観察することです。

十一月二十九日（日）午前六時四十分、もやのかかった、薄暗い現地に直行しました。医療刑務所寄りの道路に車を止め、池を見回しました。もう、カルガモのんびりと羽を休めて池に浮かんでいます。ざっと、指を折って勘定してみると、五十羽は確認できます。

気がつくと、衣浦線側の土手の上で天石君のお父さんを初めクラブの子どもたちが双眼鏡を覗き込み、早朝ウォッチングが開始されています。

「あっ、また来た。あっち、南だ！」「本当だ！たくさんだなあ。一、二、三、四………十七だ！」

子どもたちが、数十メートルの上空を二度三度と用心深く旋回をしながら着水地点を探すカルガモの大群を発見し、寒さも吹き飛ばような勢いが伝わってきます。初冬を迎えた大谷池に飛来したカルガモの記録を紹介して



完成も近い大谷公園遊歩道

おきます。

六時三十分……鳥の姿なし。セグロセキレイ・スズメ・カラスなどの鳴き声するだけ。
六時四十分……岸にカルガモとカイツブリが十一羽。池の中に十六羽。
六時五十分……岸から四羽池に飛び込んだ。これで、全部池の中になった。
七時十一分……南東の山の方から九羽やって来て飛び込んだ。
七時十五分……南の方から四羽、五、六回まわってから池に飛び込んだ。
七時二十分……セグロセキレイが二羽来た。
七時三十分……東から十六羽来て、四回まわって、そのうち九羽が舞い降りた。
七時四十分……カルガモが八羽やって来た。
七時五十分……カルガモ・カイツブリ全部一斉に飛び立った。池には一匹もいない。
一時〇〇分……一匹もいない。
三時四十分……一匹もいない。
四時三十分……一匹もいない。

ノートには、こんなメモが書き込まれています。

「カルガモは群れをつくって一度にやって来ると思っていたが、数羽ずつの群れだった。池に降りて来る時、正面から見ると、羽をおいかぶせるかっこうでパラシュートに似ていて、おもしろかった。」

「どれもみんな、三〇四回ぐるぐるまわってから池に降りて来た。」

「夜明けから次々と飛んで来て、八時前にはいっぺんに全部行ってしまったのに驚いた。」

「多い時は七十羽にもなって、あんな大群のカルガモを見たのは初めてだった。」

「一匹もいなくなった池を見て、とっても淋しくなった。」

いずこの山の寝ぐらからか、群れをつくって飛来するカモがしばしの休息のあと一気に姿を消す。まさに、夜明けのドラマを眼の当りにした感動が、どの子のウオッチングにも書き綴られています。

「ねえ、みんな。このポットの中に熱い紅茶が入っておるよ。飲もう。」

天石さんが、子どもたちに紙コップを差し出して下さいました。冷え冷えとした大谷池のふちに、暖かな一時の風を感じました。と、日比野君が、

「ねえ、ほくのも飲んでみない？あつーいお茶だよ。きつと、あったかくなるよ。」

セグロセキレイが忙しく尾を振りながら、餌を探して、コンクリートの土手をちょこちょこ歩いて行きました。大谷池の朝八時、野鳥好きな子たちの会話が続きます。

九、広がるふれあいの輪を願って

開校以来五年間、子どもたちと上地学区のために、ふれあいの輪を広げる運動を進めてきました。大人も子どもも使える運動場や体育館作り、地域の大人を指導者にした「スポーツ少年団」づくり、学校も地域もいっしょになった「学区ふれあい体育祭」「ふれあい音頭」等々、学校・子どもたちのまわりの環境を整えていくことがまず必要だと考えたからです。そして、今、「大谷公園」が完成します。身近かな自然を利用した野外施設は子どもたちの心を一層豊かに育ててくれることでしょう。「開けゆく上地」いや、千年もむかしの「上地人」の歴史を思えば、「よみがえった上地」と言った方がよいのかも知れませんが、大谷の山から、池の底から声が聞こえてきます。「新しい上地人よ、もっと素晴らしい上地づくり、ふるさと上地づくりががんばってくれ。」

創作童話「りゅうとてんぐのかくらべ」

7、創作童話「りゅうとてんぐの力くらべ」

人間だれでも、大人も子供も、スーパーマンになりたいという夢をもっています。スーパーマンになって、自由に空を飛んで好きな所へ行ってみたい、重い物をらくらくさげて、すいすいと運んでみたいと思っています。

しかし、こんな夢は、そうかんたんにかなえられるものではありません。今なら、科学の力で機械や道具を發明しますが、むかしはそれができません。そこで、大むかしの人は、りゅうやてんぐのようなもの―これがそのころのスーパーマンを考えたのです。

自分にできないことを、りゅうやてんぐにやってもらいたいのです。りゅうやてんぐに自分たちの夢をかなえてもらいたいです。

大谷のへんは、むかしはとても深い山でした。馬もおそれ入って行かないので「馬不入り」（うまいらず）という地名ができたそうです。その山あいの大谷池も、うす気味わるくあんまり村の人が近づかなかったとい

ます。
この池に、へびだかりゅうがいたそうです。いつのころからでしょうか。池の主（ぬし）になってすんでいたとい

います。
また、上地の村に大きな一本杉がありました。これはほんとうです。てんぐは、日本中どこにも話が残っています。いたずらすぎで、どこかあいきょうのあるてんぐは、愛知県にもいました。このてんぐとりゅうを対決させたらおもしろいだろう、と思って書きました。ちょうど、今年は竜の年ですので、それにふさわしくスケールを大きくしたつもりです。てんぐの年はないので、てんぐがおこるかも知れませんが、いつかてんぐが主人公になる話も書きたいと思います。

りゅうとてんぐの力くらべ

むかしむかしのことです。

上地の村のまん中に、とてつもなく大きな杉の木がありました。何しろ、子供たちが十人でかかえても、かかえきれなかったといえます。だから、どのくらいの高さなのかよくわかりません。上の方は、時々霧だか雲だかがかかりました。

この一本杉の下のひろばで、子供たちはおにごっこをしたり、かくれんぼをしたりしてあそびました。大人のは、しごとの休みにあせをふいたり、村のことをそうだんしたりしました。

ある日のことでした。

いつものように、村の人たちが五、六人、一休みしていました。

「きのう、わしが山しごとから帰る時にな、道のまん中に一かかえもある



木が、たおれておった。ありゃあてんぐのしわざかも知れん。」

「ええ？ てんぐの？。」

「そうだ。あんなことをやるのは、てんぐくらいしかおらんぞ。」

「そうかなあ……。」

「ごんさんこの馬が、三日ばかり前からどこかへ消えたということだが、ひょっとするとそれもてんぐのいたずらじゃないかなあ。」

「ううん、そうかも知れんぞ。」

「このあいだ、わしが馬頭から帰る時、大谷の池のそばを通ったらな、池の中で何か光ってあったぞ。金色の玉のようなものだったが……。あれもてんぐが何かやらかしたのかな。」

「なんだかきみがわるくなってきたなあ。」

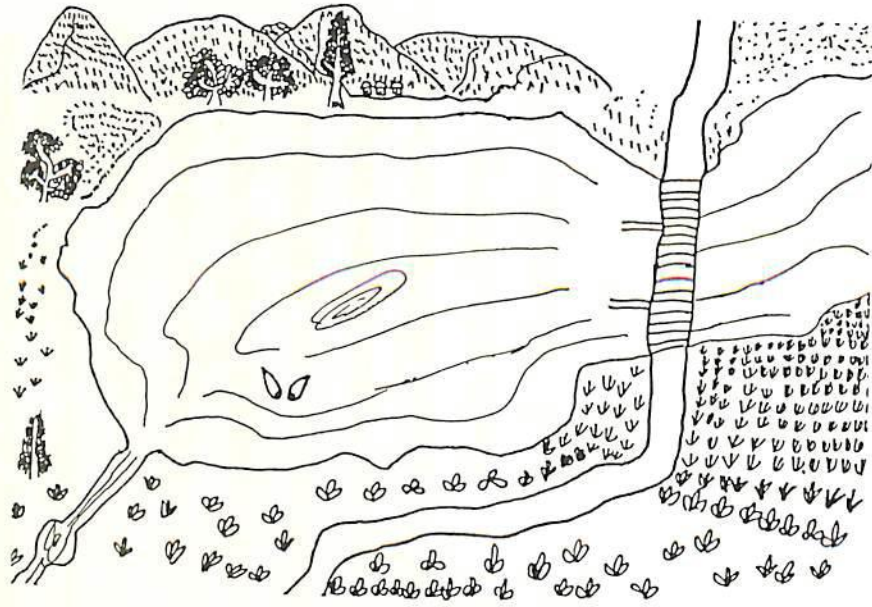
その時、杉の木の上の方で、きゅうにザワザワと風がおこりました。

「ワッハッハハハ。」

とつぜん大声がひびいてきました。村の人は、一せいに見上げました。

「ヒャー出たあ！」

「で、で、てんぐだあ、てんぐが出たあ。」



てくるか。」

もともとおっちょこちょいのてんぐは、さーっと空をひとび、大谷の池へまいりました。

「おお、うわさどおりだ。こんな池の中で金色の玉が二つも光って……なんて、めずらしいこともあるものだ。」

そこで、もっていたついで、ちょいどつついてみました。

すると、水がガバーッともありあがり、

「何をすんだあ……。」

と、かおを出したのは何と、りゅうでした。

「ややや……。」



赤いかおに高いはな、ぎょろりとにらみつける目、耳もとまでさけた大きな口。みんなは、ころがるようにして、にげて行きました。

てんぐは、ひらりと地上にとびおりました。

「ワッハッハハハ。人間どもがあわててにげおったわい。……だが、おかしなことを言っておったな。わしは太い木をたおしたり、馬をにがしたり、いたずらはしたが、大谷の池のことは知らんぞ。」

岩へこしをおろして、うでをくんでぶつぶつひとりごとを言っています。

「この村のことで、おれの知らんことはないはずだ。こりゃおかしいぞ。ちょっくら見

さすがのてんぐも、びっくりして後ずさり、でも、そこはてんぐです。さっとまい上がり、一目さんに一本杉までとんで帰りました。

「ああびっくりした。まさかりゅうの目玉だとは……。あぶないところだった。もし水の中へ引きこまれたら生きて帰れんな。」
と、むねをなでおろしました。

さて、そこでてんぐは考えました。
「どうもしゃくだ。このおれがりゅうにおどされてにげて帰ったとは、てんぐのはじだ。ようし、やっつけてやろう。」

あくる日、てんぐは大谷の池へ出かけていきました。まず、池のそばのんだら山から池の方へ向かって、よび



かけました。

「おうい。ねぼけのりゅうすけ。いつも眠ってばかりで、たいくつだろう。」
りゅうは、かおを出しません。そこでてんぐは池のふちへおりて、つえで水をかきまわしました。

「どうだい。たまにはかおを出したら。」

「だれだあ、やかましい。せっかかない気持ちで寝ていたのに。」

「おれだ。」本杉のてんぐさまだ。どうだ、おれと「ちよう力くらべをせんか。」

「なに、力くらべ?。」

りゅうもそう言われて、だまって引き下がると、よわ虫と思われてしまいます。

「世の中にわしほど力のあるものはおらん。そのわしに力くらべを申しこむなんて、お前がはじめてだ。あいてになってやるが、どうなっても知らんぞ。」

「何を、このてんぐさまの力を知らんな。」

「ばかを言うな。わしの方が強いにきまっておる。」

「おれの方だ!。」

「わしの方だ!。」

「こんなことを言いあっていても、きりがありません。そこで、てんぐが

「いいか、おれの力を見せてやる。おどろくな。」

そう言ったかとおもうと、牛くらの大きさの岩を、ぐいともち上げ

「ヤーッ。」

と一声、向こうの山へ投げつけました。岩は山をこえて見えなくなりました。

「どうだ。おれの力はこんなものだ。」

「へへへ、そんなことでおどろくか。わしの力を見せてやる。」

りゅうは、カッと大きな口をあけ、そらに向かって水をふきあげました。ゴーゴーと水の柱が天をついて、雲にとどきそうです。

「どうだ。わしの力はすごいだろう。」

「いや、おれの岩の方が遠くへとんだ!。」

「わしの水の方が高く上がった!。」

どちらも引き下がりません。とうとうけんか別れしてしまいました。

三日後、またてんぐの方から出かけて行きました。

「きょうこそ、どっちが強いかはっきりさせよう。」

「よしよし、まっておったぞ。」

水の中からおを出して、りゅうがこたえます。

てんぐは、いよいよおくの手を使います。大うちわをもちだして風をおこすのです。

ヒュー ヒュー

ヒュー ヒュー

だんだら山の木がたおれます。石がとんで行きます。タヌキやサルはあなの中でふるえています。

それ ヒュー ヒュー

これでもか ヒュー ヒュー

地上ではとても立っておれません。でも、りゅうは水の中へもぐっているから平気で。池の中はしずかなものです。

これでもか ヒュー ヒュー

これでもか ヒュー ヒュー

いくら波が立っても、りゅうは水の中ですずしいかおをしていました。

「よし、そんならもつとそばへ行……。」

てんぐは池のそばへ下りかけました。

その時です。とつぜんりゅうがかおを出して、水の柱をふきだしました。

ゴオー ゴオー

ゴオー　ゴオー

てんぐめがけて、
ふき上げます。いつ
のまにか黒い雲も出
てきて、ひどいあら
しになりました。

ゴオー　ザザザー

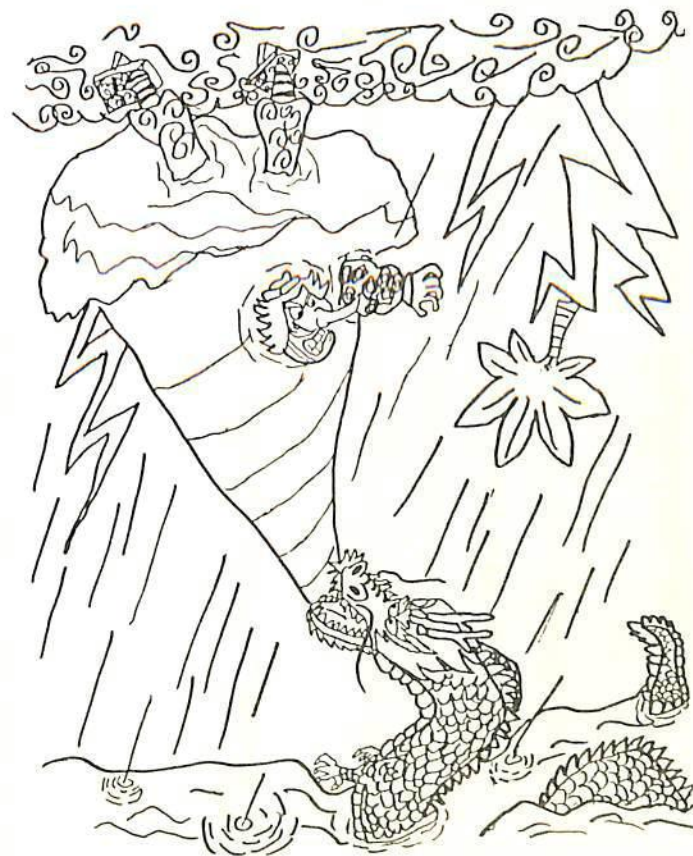
ゴオー　ザザザー

あっと思ったら、

てんぐの手からうち
わがうちおとされて
しまいました。

「しまったあ。」

てんぐは、うちわをひろおうとしましたが足がすべってころがり、どろだらけ。そこへ
ガバーッと大ごう水です。



「こりゃかなわん、

ハハ、ハックション、ハックション。」

てんぐは大きなくしゃみをしながら、

どこかへ行ってしまうました。

近ごろ、旅先きの土産物屋の店先で、よく「〇〇昔ばなし」という小冊子が目に止まります。

気に入ったものがあると、それを求めて列車の中で目を通したりしますと、その土地自身の歴史と、そこにまつわる昔ばなしがオーバーラップして、旅をいっそう楽しいものにしてくれます。

今みたいに、なんでも機械化され、画一的になってしまつては、人間のもつ創造力とか感性が失われてしまいます。私たちはこの、失いかけているものが、いかに人間的であり不可欠のものかということを決して忘れてはいけないと思います。その中の一つに、昔ばなしもあるのではないのでしょうか。

その土地の伝説や昔ばなしは、その自然に無理なくとけこんでいって、子どもたちだけでなく、大人にも親しまれ伝えられていくものだと思います。ここに、「松風のうた」につづいて、「りゅうとてんぐの力くらべ」ができあがりました。まもなく、大谷公園もできあがる予定です。これで、大谷公園を訪れる楽しさが、また大きく広がった思いがします。

大谷公園を散歩しながら、「やきもの師」や「りゅうやてんぐ」「一本杉」のあったころのことを考えることは、どんなに楽しいことでしょう。わたしたちも、この上地の昔に夢を走らせながら、第三話を期待したいものです。

おしまいになりましたが、さし絵をかいてくれた三年生の鈴木真一君・大北哲生君・成瀬貴彦君、四年生の平有祐君・都築正範君・落合直子さん、ありがとうございます。

上地小学校校務主任 本田 源美

樹齡三百年の「一本杉」を訪ねて